
タ・ケ・ル

高遠響

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

タ・ケ・ル

【ΖΖコード】

Ζ1190Y

【作者名】

高遠響

【あらすじ】

タケル小学校6年生。サッカー好きの勉強嫌い。なんてことはない少年だが、彼には特殊な能力があった。彼はテレパシスト。親友のトーマだけがそれを知っている。

ある日タケルは琴音という美少女と出会い。どうやらこの美少女、訳ありのようだ……。

タケルとトーマと琴音。三人の少年少女のひと夏の冒険物語。

祭りの夜に< ;1> ;

1・祭りの夜に

「じゃあ、お楽しみの通知表を渡すぞお！」

担任の成田先生が大声を張り上げた。途端に六年一組の教室の中は「え」とも「ぎやああああ」とも「はああ」ともつかぬような子供たちの声で満ちあふれた。

「夏休みだからって浮かれて遊びまわっている場合じゃないぞお。この通知表をありがた~く受け取つて、夏休みの過ごし方をよおく考えるよ~にな！」

ひょろひょろとしていて銀ぶち眼鏡の成田先生はにやにや笑いを浮かべている。いつもにこにこしているのはいいが、にしきつ時は憎たらしい。

成田先生は名簿順に名前を呼び始めた。

タケルは机の上に顎へあごへを置くと、どんよりとした顔で前を見る。

「川上タケル！　おい、タケル！」

成田先生の非情な声が飛んでくる。力行なんてすぐ回つてくるから大嫌いだ。

タケルは力なく立ちあがると、見るからに嫌そうな顔でのろのろと前に出た。

くすくすと女子の笑い声が聞こえる。

「見る前からそ~がつかりするなよ。頑張ったよ、つんうん、体育はな」

成田先生は笑いながら通知表を目の前に差し出した。

「一学期は運動会があるじゃないか！　お前の華麗な走りを見せてやれ！　しつかり夏休みに鍛えとけよ。宿題をしてからだけだな」

「あ~~もう~！」

タケルはひつたくるように通知表を受け取ると、どすどすと大股で自分の席に戻つて勢いよく座つた。また女子がくすくす笑う。

「一つ折りの通知表を少しだけ開けて、顔を突つ込むよつとして見る。

「…………」

体育は全項目「よくできる」だ。これは予想通り。問題はその他だが……。

無情にも五段階のど真ん中から下がずらりと並んでいる。社会に至つては全ての項目が一番下と来ている。予想通りと言えば、予想通りではあるのだが……。

「…………まずい。これはまずい」

パタンと通知表を閉じると、机の上に置き、その上に頭を乗せた。教室のそこかしこから、タケルと同様の焦りの“声”や、嬉しそうな“声”が波のように聞こえてくる。

やつた！ これでゲームソフト、ゲットだ！

わあああ、こんなの見せたら母ちゃんに殺されるかも。

やばい！ やばすぎるーー！

びみょーな内容だあ……。塾でなんて言われるかなあ。

タケルはその“声”をぼんやりと聞きながら大きなため息をついた。多分俺が一番やばいんじゃねー？ 心の中でそう呟く。軽やかなチャイムが鳴り響き、教室の中のざわめきは一層大きくなつた。

「なんだかんだ言つても、小学校最後の夏休みだ。皆、楽しんでこいよ。事故と病気には十分気をつけてな！ 起立、礼！」

成田先生の言葉を合図に教室のにぎやかさは最高潮に達した。

タケルはやけくそのようにカバンの中に通知表を突つ込んだ。そして勢いよく椅子を机の中に入れた。

「タケル！ どうだつた？」

クラスメートがばんつと勢いよくタケルの背中を叩く。

「いつてえ！」

タケルは大げさに痛がつて見せた。

「骨折れた！」

「お前の骨がこれくらいで折れるか！」

友人はけらけらと笑う。

タケルは体育だけが取り柄というだけあって、それほど大柄ではないが獣犬のようにしなやかで軽やかだった。確かに背中をはたかれたくらいで骨が折れるはずもない。足も速いので、クラスの男子の中では一目置かれている。地元のサッカーラブに入っていて、レギュラーとして活躍していた。日に焼けた顔に、強い生命力を感じさせる瞳が印象的な少年だった。

「で、どうだつたつてば」

「聞くな……」

タケルは顔をしかめて見せた。友人はにやにや笑いながら頷いた。
「いいんじゃね？ 天は二モツを『えずつて言つじやん』

「なんだよ、それ」

「それで勉強まで出来たら、嫌われてるつてこと」

「バカつてことじやねーか！」

「そうとも言つな。じやあな！」

友人はそう言いながら走つて教室を出た。その後ろ姿にタケルは苦笑いしながら手を振つた。そして、教室の一一番奥の席に向かつて叫ぶ。

「トーマー！ 帰ろうぜ」

「うん」

自分の席で荷物をまとめている山本冬馬、トーマーはゆっくりと立ち上がる。小柄で色白で眼鏡をかけているトーマーは、タケルとは対照的に、見るからに秀才といったところだ。実際、トーマーの成績は恐らく学年で一番に違いないとタケルは信じている。タケルを始め、クラスの何人かの男子はわからない問題があるとトーマーに教えても

らう事にしている。トーマの教え方は先生よりも上手いというのもつぱらの評判だ。わかりやすいし、根気よく教えてくれるし、なによりもうれしいのは、自分の親のよつに「なんでこんなのがわからないのー」などと言わないところだ。成田先生はトーマの事を诸葛亮などと呼んでいる。ちなみに孔明といつのは『三国志』といつやたら長い物語に登場する中国の賢人である。それくらい賢いのに、それを鼻にかけることなくいつも二口二口しているところが、意外な事にトーマはタケルの親友なのである。見た目も中身もまったく違うのに、しそつちゅう一緒にいるので、二人は「オセロ」とクラスメートから呼ばれていた。勿論、黒い方がタケルで白い方がトーマだ。ちなみにオセロをトーマとタケルがすると、ほとんどパーフェクトでトーマが勝つといつのは言つまでもない。

「なあなあ、トーマ」

タケルは少し声をひそめる。

「天は荷物を『えずつて何?』」

トーマは一瞬目を見開き、それからパチパチ瞬きした。

「天は荷物つて……それを言つなら『天は一物』にぶつくを『えず』だよ。秀でた才能をいくつも持つてるモンじやないつてこと」

「……やっぱりバカつてことじやねーか」

タケルが唇を突き出して不服そうにぼやくので、思わずトーマは笑いだした。

「運動神経いいつて充分だと思つけど」

「どーせ俺は筋肉バカですよ。脳ミソの代わりに、カニミソが詰まつてるんだい」

タケルはむくれた。

「カニミソ……つて」

「高級なんだぞ、どうだ参つたか」

無意味にいばるタケルを、トーマはさらりといなす。

「……なんで高級か知つてる? ちょっとしか入つてないからだよ

「やっぱりバカつてことじやねーかあああ!」

タケルはトーマの肩をつかんでゆがぶつた。

「あはは……ごめん、ごめん。帰ろ」

「おひ

一人は並んで教室を出た。

校舎の外は一瞬めまいがしそうなくらい暑い空気と日差しが、セミの声であふれている。

学校の外の道路は家へ向かう子供でいっぱいだ。皆足取りも軽く、うきうきしている。

「あ～、やつと夏休みだよお」

タケルは太陽を見上げて伸びをした。ようやく教室に閉じ込められる時間から解放されるとと思うと、青空のように爽快な気分だ。タケルにとって人のたくさんいる空間に閉じ込められるという状況は拷問以外のなにものでもない。それには勉強嫌いという理由とは別に、ある特別な事情があるのだが。

「今日の夜、泊まつてもいいって？」

強い日差しを避けるように黄色い帽子を口深にかぶつているトーマは少し顔を上げると眩しそうな目でタケルを見た。

「うん。母ちゃんがいって。……それにしても大変だよな、看護師さんつて」

トーマの母親である咲子はシングルマザーで、大きな病院で働いている看護師だ。夜勤が入るとトーマはよくタケルのうちに泊まる。トーマが生まれるまでは救命救急の仕事をしていたそうで、相当なやり手のようだ。今でこそ病棟勤務だが、責任の重い立場にあるようでもとても忙しい。それでもトーマにとつては尊敬すべき自慢の母であり、タケルにとっては「いつもクールでカッコいい、超イケてるおばちゃん」だ。

タケルとトーマは保育園の乳児クラスからの付き合いで、ほとんど兄弟のようなものだった。家も近いのでショッピングに行き来している。母親同士も仲が良い。タケルの母親、佳奈のさっぱりしたあけっぴろげな性格に、咲子は癒されるとよく言つてこうだ。お

互いに色々な相談をしたりして、今では家族ぐるみで付き合っている。

タケルの家は自営業で必ず誰かが家にいる。人の出入りが多いので、トーマを預かるくらいタケル一家にとつてはなんでもない。それに佳奈はタケルと全く違う性格のトーマのことがお気に入りなんだ。いつも犬みたいに駆けずりまわっているタケルと、物静かで目立たない、とんでもなく真面目な秀才のトーマ。見ていると飽きないらしい。

「そういえば、今日の夜の高乃城 たかのしろ 祭、行つてもいいつてさ」

「え、本当？」

トーマはぱつと目を輝かせた。

高乃城祭というものは高乃城市の中心にある大きな公園、高乃城址たかのしろあと 公園で毎年開かれている祭りだ。この辺りでは唯一の夏祭りだ。この祭があつてようやく夏が来たという実感が湧く。

「トーマと一緒にだったら安心だからって」
鉄砲玉のようなタケル一人では何をするやらわからないが、トーマが一緒にたらちゃんとブレークをかけてくれると言つたところだ。

「うーん、夏休みつていよいよな~」

タケルはもう一度嬉しそうに伸びをした。

> 続く

ただいま！ と大声で家の扉を開けると、妹のアコミがペタペタと足音を立てながら廊下を全速力で走つて來た。

「にいにい～～～！」

「おお、アコ～」

タケルは手にしていた上靴袋を放り投げて、駆け寄つてきたアコミをぎゅうっとハグした。

「なんだ、帰つてたのかあ」

「ふにふにのほっぺたをつんつんすると、アコミはにい～～と笑つた。

妹のアコミはまだ一歳で、保育園に通つている。ふわふわの髪の毛を頭のてつぺんでチヨロリンッとくくつついて、走る度にそのチヨロリンがふかふか揺れる。やたら人懐っこい性格で、タケルを見上げる瞳からはいつも“好き好きビーム”が出ているような気がしてしょうがない。まるでハムスターかミーウサギみたいだとタケルは思つてはいる。歳が離れているからか、タケルはこの妹が可愛くて仕方ないのだ。時々、宿題のプリントを派手に破かれたりするが、どうせ適当にしかやらないプリントである。どうつてことはない。もつとも、その後、一人して母親に怒られるのだが……。

タケルはアコミをぎゅう～～と抱き上げる。背中でラングセル、前に妹、なんともかさの高いことだ。

廊下の奥の扉からひょいと父親の哲司が顔を出した。

「あれ、父ちゃん。いたの？」

「ああ。近所の仕事だから毎日飯は家で食べよつと思つて。もう少ししたらまた行く」

哲司は腕の良い大工だ。口数は少なく余計な事はほとんどしゃべらないが、荒っぽい口をきくこともない。後輩の話にもよく耳を傾け、相談にも乗つたりしてくるようだつた。そんな哲司を慕つて、

家にはショッちゅう大工仲間が出入りしている。絶大な信頼を得ているようだ。

日に焼けてがっちりした身体の、見た目はかなりいかつい男だが、意外なくらいに優しい目をしている。アユミには勿論、タケルに対しても穏やかで滅多に怒る事はない。しかし、何か悪い事をした時はどうにも逆らえない強い瞳で見据えられる。そんな時はまるで心の奥底まで見通されるような気がして、哲司の前では絶対に嘘はつけないとタケルはいつも思う。

タケルは妹を哲司に渡した。

「なんでアユミ帰つてんの？」

「今日は昼から母ちゃんが家にいるからつて

「あ、そうだった」

言われてみれば、高乃城祭に出店する町内会の準備で、近所の人々が何人か家に来ると言つていたような気がする。

タケルはでかい声でわめきながら台所に入った。

「あ～、腹減つた！」

台所では母親の佳奈がちょうどそつめんをゆがいていた。ショートカットで、スラリとした後ろ姿だけを見ていると一人の子持ちにはとても見えない。学生の頃は陸上をしていて、県大会で好成績を収めたそうだ。タケルの運動神経の良さは自分から受け継いだのだと、時々自慢している。

佳奈はタケルの声を聞いてちらりと振りかえった。

「おかえり」

「あ～、腹減つた！」

「通知表は？」

「あ～、腹減つた！」

「返してもらつたんでしょ」

「あ～、腹減つた！」

佳奈が片方の眉をつり上げて「こいつは……」といつ表情を浮かべる。まあ、予想通りなんだろうけど……といつ“つぶやき”がタ

ケルの頭の中に届く。

「あ～、腹減つた！ メシ、メシ、母ちゃん、メシ！」

タケルはわざとらしくらい大げさに叫んだ。

佳奈はにやりと笑うと、タケルに人差し指を突きつけた。

「食事の前に見たらきっと食欲失くすような内容なんだろう。後でしつかり見せてもらうよ。覚悟しておきな」

タケルはとほほ……と頭を抱えた。

佳奈は一人で工務店と家の事をやりくりしている。男勝りでしつかり者だ。タケルの友人達の間では「細くてきれいなお母さん」などと言われているが、なんのなんの、肝つ玉母ちゃんという言葉は佳奈のためにあるのだと、哲司が時々口にするくらい、肝が据わつていて頼りがいがある。中身は男なんじゃないかと思つくらいだ。竹を割つたような性格で、裏も表もなく、とにかくさばさばしている。体育会系で鍛えられてきたからか、恐ろしく負けず嫌いだ。責任感と正義感の強さは相当で、間違つていると思つたら相手がヤクザでも注意しかねない。口うるさくてかなわない時もあるが、佳奈が一家の太陽であり、彼女がいなければ家も仕事も回らないというの子供のタケルでもわかる。

「トーマはいつ来るの？」

佳奈はテーブルの上にそつめんを大盛りにした大皿を置きながらタケルを見た。

「六時くらいだつて。家の片付けしてから来るつて

「えらいねえ。トーマは。お前も少しは自分の部屋、片付けな！」

佳奈に頭をはたかれそうになり、タケルは慌ててよける。

「明けても暮れてもサツカーサツカーフ。ヘディングのしすぎでバカになつたんだよ、きっと。バカにつける薬はないって言うけど、トーマの爪の垢でも煎じて飲んだら、少しはましになるかしじ、腹壊します。……いてえ！」

べえっと舌を出した途端に佳奈に頭をはたかれた。

>
続
<
<

六時きつぢりにトーマは川上家の前に到着した。インター ホンを鳴らそと指を伸ばした途端、玄関の扉が勢いよく開いてタケルが飛び出してきた。

「相変わらず早いね」

トーマが小さく口笛を吹き、タケルは胸をそらした。
「トーマがその角の辺りに来たくらいでわかる」

「だんだん範囲が広がってるみたいだね」

タケルには特殊な能力がある。どうやら生まれつきの力のようだつた。

人の考えている事が“聞こえてくる”のだ。テレパシストというらしい。タケルにとっては当たり前のことだったが、大きくなるにつれてその力が他の人にはない、特殊なものである事がわかつてきた。

トーマはそれこそ赤ちゃん時代から一緒にいるのでタケルのその力のことは知っていた。テレパシストという言葉を知つてタケルに教えてくれたのもトーマだ。

一人は「どれくらいの距離から“声”が聞こえるか」というのをよく試す。トーマがタケルに心の中で呼びかけながら歩いてくるのだ。そしてどの辺りで聞こえてきたかというのを調べる。

ゲーム感覚でやっているが、だんだんタケルの能力は強くなつてきているようだ。聞こえ方も変わって来ていて、最初は波のように聞こえたり聞こえなかつたりしていたが、最近ではかなりはつきりとした言葉で聞こえることが多い。

「ちょっとつうつうしいかも……」

タケルの表情が少し曇る。

「最近、授業中に気が散つてしまふがない」

外で身体を動かしている時にはほとんど気にならないが、じつと

しているとどうしても聞こえてくるのだ。同じ教室の中にいる友達の様々な雑念があるでテレビかラジオの音のよう、さわさわと頭の中に響いてくる。

折しも思春期にさしかかってくる年頃だ。時には聞きたくないような内容の時もある。小さい時と違つて、少しずつ皆の心の中も複雑になつていくようだつた。あんまり真剣に耳を傾けていると、だんだん人間不信になるような気がするので、なるべく聞かないようにしようと思うのだが、なかなかうまくいかない。耳から聞こえてくる音なら耳栓をすればいいが、こういう声はどうすれば聞こえなくなるのだろうか。その術をまだタケルは知らない。

なんでこんな力が自分にあるのだろうかと時々思う。授業に集中できないのは勉強嫌いという理由だけではないのだ。今まで役に立つた事と言えば、アユミが生まれたての赤ん坊の頃、彼女が何を欲しがつているかがなんとなく伝わってきて、それを佳奈に通訳してあげるくらいだった。

今のところ、この能力をちゃんと理解してくれているのはトーマだけだつた。両親にすらまだ言つたことはない。打ち明けてみようかとも思うのだが、ふんざりがつかないので。素直に受け止めてくれるか、それとも「同じつくならもうちょっとマシな嘘を言え」と怒られるか、はたまた「ヘディングのしきでついにおかしくなつたか?」と病院に連れて行かれるか……。どちらにしても、試すにはかなり勇気がいる。

「……きっと何かいい方法があるよ」

トーマはタケルの肩をぽんぽんと叩いた。僕が協力するから……そんな声がタケルの中に伝わる。トーマのあたたかい“声”が聞こえると何故かほつとする。

と、一転してトーマの顔にいたずらっ子のような笑みが浮かんだ。「ところで、どうだつた? 今日は何発?」そして楽しそうにタケルを覗き込む。

「五発。五年の三学期よりは一発少なかつたな

タケルは佳奈にはたかれた頭を大げさに撫でてみせる。痛いとい
う程のものでもないのだが、ぽんぽん頭をはたくから余計にバカに
なるのだと、タケルはいつも思つ。よっぽどはたきやすい頭をして
いるらしい。

「トーマの爪の垢でも煎じて飲めつてさー。」

「お腹壊すつて」

「俺も同じ事言つたら、はたかれた」

二人は顔を見合させて笑つた。

> 続く <

夕方になつて二人は自転車に乗つて家を出発した。高乃城址公園までは自転車で十五分くらいだ。少し遠いが、タケルはサッカーの練習で毎週行つてるので特に問題もない。

高乃城址公園の自転車置き場は既に八割くらいが埋まつてゐる。そこに自転車を停めると一人は公園の中に入った。

公園の中央には高乃城神社があつて、そこが昔の天守閣があつた場所らしい。城を守るために作られていた堀の名残の池があり、その周辺は緑の豊かなビオトープになつていた。他にもサッカーや野球が出来るような広いグラウンドがあつたり、遊具のある広場もある。日本庭園のようなスペースもあり、訪れる人は子供からお年寄りまで様々だ。ちなみにこの辺りの小学生は一年生の遠足でまずここに来るというのがお決まりだ。

遊歩道から神社の参道に入ると、道に沿つてずらりと露店が並んでいる。まだ辺りには日が残つてゐるが、露店ごとに眩しいライトが灯されていて、白い光を参道に落としていた。自家発電のモーターの音が景気よく響いてゐる。この音を聞くと、タケルは妙にそわそわしてしまう。

タケルは思いつきり鼻から息を吸い込む。綿菓子の甘い匂いがするかと思えば醤油の焦げる芳ばしい匂いがする。匂いのおもちゃ箱のようだ。

「いい匂い……」

トーマもくんくんと鼻を鳴らした。いか焼きのソースの匂いがいきなりお腹を刺激する。軽く夕食は取つていたがこういうのはだいたい別腹だ。

「じゃ、さつそく行きますか！」

タケルがトーマの手をぐいっと引っ張つて走り出した。

神社にたどり着くにはまつすぐ歩けば五分程度だが、あつちで食

べ、じつちで立ち止まり、と寄り道ばかりしてこると、鳥居の下にたどり着くのに一十分ほどかかっていた。

「そんなにいっぱい持つてたらお参りできないよ」

トーマがくすくす笑う。タケルの右手には焼きトウモロコシ、左手にはリンゴ飴とベビーカステラの袋が握られている。タケルはずはどれを片付けるべきか、真剣に悩んでいる。

「とりあえず、トウモロコシ……だよな?」

タケルはきょろきょろと周りを見渡した。神社脇の木立の中にベンチが置いてあるのが見える。一人はそこへと移動した。

古びたベンチに腰をかけ、タケルはさっそくトウモロコシにかぶりついた。もりもりつといつ歯¹いたえと醤油の味にタケルはつなる。「う~、うま!」

トーマは笑いながら自分の右手の袋を開け、中からタイ焼きを取りだす。

「昔はおもちゃとか欲しいって思つてたけど、最近は食べる」とばかりだね

「なんでこいつ、すぐに腹すくんだらうな?」

ピカピカ光るおもちゃが欲しくて駄々こねて、佳奈によく怒られていた。父親がこつそり買つてくれるのだが、そういうおもちゃは大抵すぐに壊れてしまう。次の日には「ミニ箱に突つ込まれることもしばしばだった。今はとにかく食べ物を腹に突つ込む方がなによりも優先だ。

タケルはあつといつ聞にトウモロコシを平らげて、醤油まみれの指をぺろつと舐めた。

「手、洗つてこよ」

「トイレこの辺にあつたつけ?」

「神社のさ、手洗つヤツあるじゃん」

「お清め用だよ、あれ」

トーマが苦笑いする。神社のお清めの水で醤油のついた手を洗つて罰が当たつたりして。

「醤油つて食い物だぜ。罰なんてあたんないって」

タケルは口をとがらせた。

二人は揃つて立ちあがると神社の方へと駆け出した。

神社の中は橙色の柔らかな灯りを灯した提灯がたくさんつるされていた。遊歩道に立つてある水銀灯の白い光と違つて、随分と落ち着いた光だ。お参りをする人の数は結構多く、昼間の熱気の名残と人いきれで蒸し暑い。

境内の一角ではにぎやかな神樂 かぐら が流れていて、その前でハッピ姿の青年が飛び跳ねながら踊っている。地元の伝統芸能の踊りだそうだ。その周りには人だかりが出来ていて、携帯やビデオを撮る人もいた。

社務所前ではお守りやおみくじを求める人が並んでいる。まだ早い時間だがそこそこの人出だ。夜が更ける頃にはもつと混雑してくるだろう。

二人は人の間を縫うようにしながら参道の脇にある手水屋へと向かつた。

手水屋の石造りの水槽はところどころ苔が生えていて、いかにも古そうだ。水槽の端には色のあせた龍の彫り物があつて、その口からちよろちよろと水が出ている。

タケルはベビーカステラとリンク飴の袋をトーマに持つてもらつて、うつぶせにおいてある柄杓を取ると、龍の口から流れる水を受け、手を洗つた。

後ろに一步下がつた時、むぎゅっと誰かの足をふんづけた。きやつという声がして、タケルは思わずバランスを崩してよろめく。ふんづけた足の主と強く身体がぶつかりそのまま一人して尻もちをついた。

「ごめんなさい！」

タケルは慌てて相手を見た。

> 続く <

長い黒髪の、同じ年くらいの女の子だった。
傍にいたトーマが慌てて駆け寄つて、女の子を起こそつと手を差し出している。

尻もちをついた拍子に、肩から下げていたポシェットの中身が転がり出たらしく、携帯電話と財布が地面に転がつていた。丁度手を拭こうとハンカチを出したところにタケルとぶつかったらしい。タケルは慌てて携帯電話と財布を拾い、ついた泥を自分のズボンで「こじこじ」と拭つた。そして慌てて立ちあがつた。

「ごめん！ 大丈夫だつた？」

女の子は顔をしかめて汚れたスカートを手で払つてゐる。そしてタケルから携帯電話と財布を受け取つた。

「……ありがとう」

「けが、してない？」

「うん」

うつむき加減に頷くと、そそくさと人混みの中へと紛れて行く。
人前でぶざまに尻もちをついてしまつたのがよほど恥ずかしかつたのだろう。

「悪いことしちゃつた……」

タケルは頭をかきながら隣のトーマを見た。

トーマはぼーっと女の子が消えて行つた方を見ている。

「トーマ？」

タケルの中に、トーマの心のざわめきが伝わつてくる。今までに感じたことのない、妙に浮ついた、ほのかにピンク色のざわめき……。

「トーマ？」

もう一度声をかけるとトーマははつと我に返つた。

「タ、タケルは大丈夫？」

慌ててタケルの背中や膝を見る。トーマのやつ、何を動搖しているんだ？ タケルはきょとんとしながらトーマを眺めた。

決まりが悪くなつたのかトーマはきょりきょろと視線を泳がせた。

「ん？」

急にしゃがみこみ、何かを拾い上げた。立ちあがつたトーマの手の中にはビー玉ほどの水晶玉と龍の彫り物のついた根付けが乗つていた。

「何？」

タケルが覗き込む。

「ストラップ？ えらく渋いな」

トーマは柄杓の水をかけて泥を落とした。水晶玉には小さな幾何学模様が彫りこまれている。家紋のよつだ。

「根付けだよ。紐が違うだろ？」

確かに細い黒い糸のよつな紐ではなく、古びた細い組紐だ。千切れたようである。

「財布とかにつける、おまじないみたいなものだよ。……」これって、もしかして、さつきの？」

トーマがタケルを見た。

「確かに財布、落としたよな。でもさ、子供が持つのに渋くない？」

「……まあ、確かに」

トーマは手の平に根付けを乗せてじっと見つめている。

「……でも、なんとなく、さつきの子の持ち物のよつな気がするんだけどな」

そう呟きながら、トーマは自分のポケットに根付けをねじ込んだ。二人はそのままなんとなく歩き出し、神社の方へと向かった。

人波に押されるように境内に入り、本殿の前にたどり着く。財布から賽銭を出そうとして、ほとんど露店で消えてしまつたことを思い出し、タケルはぺろつと舌を出した。

「タダでも願い事、聞いてくれるかな」

「さあ」

トーマは笑いながら十円玉をタケルに渡してくれた。

申し訳程度に手を合わせると、参道から少し離れたところにベビーカステラを口に放り込む。

「これ、アコミちゃんにお土産じゃなかつたの？」

トーマが覗きこむ。

「こんなのが食わせて、うっかり喉に詰めたらどうするんだよ！ つて母ちゃんがうつるせいんだ。それにさ、まだ露店の食べ物は食べさせないで！ つてさ。俺には何食つても大丈夫！ みたいな事いうくせに、アコには妙に細かいこと言つんだよ。ああいつのを猫かわいがりつて言つんだろ？」

タケルは不服そうに唇を尖らせた。

「タケルだつてアコミちゃんの事、充分猫可愛がりしてると思つけど。ちょっととすりむいただけでも大騒ぎしてるじゃん。自分はしおつちゅうズルむけで、だらだら流血してるのに」

「しょうがねーよ。かわいーんだから。ほれ、トーマ、食え」

トーマの口に無理やり一つ押し込み、自分は続けざまに二つとほおばる。と、

「う……喉に……詰まつた」

急に目を白黒させる。トーマが慌てて口中をぽんぽんと叩いてくれた。

「タケルが詰めてどうするんだよ。欲張りすぎなんだつてば」

タケルはうぐうぐ（水、水）と言いながらさつきの手水屋の方へ

と向かって走りだした。

苦笑いしながら仕方なくついてきたトーマがあつと声を上げた。

手水屋のところにさつきの女の子の姿があった。下を見ながらきょろきょろと何かを探してくるようだ。

「やつぱりそうだつたんだ！」

トーマがタケルを追い越して走り出す。いつもは大人しいトーマ

が珍しいこともあるものだとタケルは首をかしげて後を追つた。

泣きそうな顔で足元を覗き込んでいる女の子にトーマは声をかけ

た。

「あのー！」

はつと顔を上げた女の子と視線が合つた途端に、トーマは急におどおどし始める。

追いついたタケルは柄杓で水を飲みながら、トーマと女の子を交互に見比べた。

それほど明るくない中でもはつきりとわかるくらいトーマは耳まで真っ赤になりながら、上を見たり下を見たり、女の子を見たりタケルを見たりしながら、あの、その、と言葉を探している。じゅわじゅわと頭のてっぺんから湯気でもたつてこるのではないかとタケルは心配になってきた。

それとは対照的に、女の子の方は不安げな表情でトーマとタケルを見ている。と、タケルの心の中に奇妙な不安感が津波のような勢いで伝わってきた。あまり普段感じたことのない感情の波だ。強い警戒心と怯え。まるでライオンの視線を恐れる草食動物のそれのようだつた。よほど人見知りの強い子なのだろうか。

「あのさ、もしかして、さつき、ここで落し物した？」

トーマがあまりおどおどしていて話が進みそうにないので、仕方なく、タケルが口を挟む。

「え……うん」

女の子がためらいながら頷く。

「それって、ストラップみたいなヤツ？」

タケルはトーマを肘でつついた。はつと我に返つたトーマは、慌ててポケットからさつきの根付けを取りだした。

「これ

「あ」

女の子の顔がぱつと明るくなる。

「良かつた。あつた」

トーマがおずおずと手を伸ばした。女の子の手の平にそつとそれを置く。

「大切なものだつたの。良かつた、あつて
「俺がぶつかつたから……。ごめんね」
タケルはそう言つて改めて女の子を見た。トーマがドキドキする
訳がようやくわかつた。

提灯の明かりに浮かびあがる顔立ちは、びっくりするほど色白で
整つていた。可愛いというよりは綺麗と言つた方がいい。それも曰
本的な、透き通つたような綺麗さ。この子なら、さつきの古風な根
付けを持つついても不自然ではないと思わせるような。きっと、着
物が似会うに違ひない。深い湖を思わせるような不思議な瞳をして
いた。こんなに綺麗な子は見た事がない。

が、色氣より食い氣の方が優先しているタケルはあっさりと視線
をトーマに移した。

「トーマ、そろそろ行こうぜ」

固まつてゐるトーマの肘を引っ張る。

「あの！」

女の子が思いきつたように口を開く。

「北口の方に行きたいんだけど……道がわからなくなつて
タケルとトーマは顔を見合せた。確かにだだつ広いが、それほど
わからいくい公園ではない。地元の人間なら滅多なことでは迷子
にはならない。

「ここ、初めて？」

「……うん」

女の子は小さく頷いた。

「い、いいよ！」

トーマが素つ頓狂 すつとんきょう な大声を出す。

「僕たちが、お、送つていくから

「え？」

「どうせ僕達ももうじき帰るしー ね、タケル！」

「え？ 今来たところじやん。まだトウモロコシとベビーカステラ
しか食つてないし。タコ焼きとミルクせんべいも外せないでしょ。」

あ、そういうや俺の財布は空だった。いやいや、トーマはまだいくらか残ってるはずでしょ。タケルはそう反論しようとしたが、トーマは既に先頭に立って歩きだしていた。

トーマのヤツ、何舞い上がってるんだ??

タケルは心の中でぶつぶつ呟きながら一人の後を歩き出した。女の子は不安そうに時々人混みの中へと視線を走らせる。誰かを探しているようにも見えた。そう言えば最初に声をかけた時にも妙に怯えた様子だった。

なんだろう、何をそんなに怖がっているんだろう。迷子になつたという不安感だけではなさそうだ。

「ここ広いから、初めてきたら迷子になるかもね」

タケルは一人に並ぶと声をかけた。あまりにも不安そのもので可哀そうになってきたのだ。

「今日は人も多いしね。でもそんなに複雑な場所でもないから、昼間だつたら大丈夫だよ」

「よく来るの?」

「俺はサッカーの練習で毎週来る。トーマはビオトープで虫見たりするのにし�ょっちゅう。な、トーマ」

タケルはトーマを見た。トーマは赤い顔をしたまま視線を合わさずうんうんと頷いた。

「ビオトープがあるんだ」

女の子の声が少し明るくなる。

「虫好きなの?」

トーマがやつと女の子を見た。クラスの女子などは虫と言つだけできやあきやあ大騒ぎする。

「好き……という程でもないけど、怖くはないかな。慣れてるから」

「へえ、珍しいね。ここ のビオトープ、いいよ。糸トンボもいるんだ」

「へえ、こんな街なのに?」

トーマの目が急に輝きだす。ほら、來たぞ。虫の話になると急に

スイッチが入るんだ、こいつは。タケルはおかしくなつてにやにやした。

初めて出会つた女の子相手に糸トンボについて熱く語りだす。

トーマは優しいし、大人しいし、とんでもなく頭が良いから、女子からも好かれそうなものだが、案外人気がない。あんまりにも興味が偏つていいのだ。テレビで見るのはニコースとかドキュメントとか、動物や昆虫物ばかりで、アイドルやらスポーツやらには全く興味がないようだつた。だからクラスの女子とはほとんど共通の話題がない。うつかりクラスの女子に虫の話なんかしようものなら、十秒で逃げられる。もっともトーマにとつて、そんな事はどうでもいいようで、おかしくなるくらいマイペースに自分の興味を追求していく。良く言えば学者、悪く言えばオタクといったところか。が、今日は少し様子が違つようだ。意外な事に女子はうんうんと熱心にトーマの昆虫談義を聞いている。それもかなり興味深いような手ごたえだ。さらに驚いた事には、彼女の心の中の不安感がだんだん小さくなつてきていたようだつた。世の中には不思議なことがあるもんだ。と、タケルは感心した。

露店の続く道から枝分かれしている遊歩道の方へと向かう。北口に向かう道は帰る人よりも来る人の方が多い。まだまだ宵の口だ。これから祭を楽しもうという人達だらつ。

「この近くに住んでるの？」

女の子がトーマに尋ねる。

「自転車で十五分くらい。君は？」

「……家は遠いんだけど」

一瞬口ごもる。そのわずかな時間にタケルの中に“声”が響いた。

なんて答えたらいいんだわつ……。ヒノオとは関係ない人達だとは思うけど……。

それは明らかに焦つていいといった様子だつた。タケルははつと

して女の子を見た。ヒノオ？ なんの事だろ？

「親戚の家に遊びに来てて……。夏休みだから……」

慎重に答えを選んでいた。

トーマは女の子の心のぶれにはまったく気がつかず、楽しそうにしゃべっている。女の子の心もまた穏やかになり、トーマとのおしゃべりを楽しんでいるようだ。

なにやら訳がありそうだ。ただの綺麗な女の子……そんなものではないような気がしてならない。この子は何がが違う。そんな思いがざわざわと心の表面を撫でて行く。それはトーマの心のざわめきとはまた違う戸惑いだった。予感と言った方がいいのかもしない。「そうだ！」

トーマの大声にタケルははっと我に返る。

「明日、僕ビオトープに行くつもりしてんんだけど、一緒にどう？」トーマのセリフに思わず目をむいた。トーマが女子を誘っている？ なんだ、なんだ、この展界は？ トーマが女の子をナンパしている！？

「タケルも行くんだよね？」

トーマは強い口調で言いながらタケルを見た。その目が、「頼むから、うんって言って！」と懇願している。

「え？ う、うん」

そんな約束はしていなかつたはずだよな……。タケルはとまどいながら勢いに負けて頷いてしまった。

「え？ いいの？」

「もちろん。高乃城の案内してあげるよ。ね、タケル！」

「う、うん」

なんだこの積極性は……。タケルはあっけにとられてトーマを見る。

三人は北口にたどり着いた。広い道路の向こう側から誰かが叫ぶ。

「琴音ちゃん！」

女の子ははつとした顔で声の方を見て、ペロッと舌を出した。

「親戚のおばさん。見つかっちゃった」

そして一人に向かつて丁寧に頭を下げた。

「どうもありがとうございます。……明日、本当にいい?」

「もちろん。じゃあ、ここで。午後は暑いから、午前中がいいよね。

十時とかでもいいける?」

「うん。……ええっと、名前は」

女の子は一人の顔を見比べた。ああー、と、トーマは声を上げる。

「僕トーマ。こっちがタケル」

そして右手を差し出した。女の子はびっくりしたよつこの手を見ていたが、ふつと笑みを浮かべた。

「私、琴音」

トーマの手をふわりと握り、そしてぐるりと踵を返した。

「じゃあ、また、明日!」

琴音というその少女は小走りに声の方へ向つて走り出した。交差点を渡つたところに若い女性が琴音を待つていた。勝手に家を抜け出した事を叱つている声が微かに聞こえてくる。

「琴音つて言うのか……綺麗な名前だな」

トーマがぼそっと呟いた。遠くに見える琴音の後ろ姿と、上気した顔で見送るトーマを、タケルはきょとんとした顔で交互に見比べた。

▽ 続く

誘拐
<1> (前書き)

タケルとトーマは夏祭りの夜に琴音という美少女と出会つ。ひと夏をこの町で過ごすためにやつてきたといつ。タケルは琴音の心中の影に気がつくが、トーマはこの美少女に一目ぼれをしてしまつたらし……。

祭から一週間が過ぎた。

タケルはこのとじる毎朝トーマの襲撃で起こそれる。八時前にはトーマが家にやってきて、タケルを叩き起こし、無理やり宿題をやらされ、十時前にはトーマに公園に連れて行かれる。夏休みの自由研究と称して毎日のようにビオトープに虫の観察に行く。しかし、虫の観察については表向きで、なんの事はない、そこで祭で出会った美少女、琴音と会うのだ。

正直タケルはどうでも良かったのだが、トーマの変貌ぶりがおかしくて、ついつい付き合つてしまつ。トーマの浮かれっぷりはただ事でなく、毎日つきつきしていのほ一目瞭然だった。よつするに一囃ぼれといつやつだ。

琴音はタケルやトーマと同じ六年生だった。夏休みを高乃城の親戚の家で過ごすといつ。住まいは東京だということだった。

今時の女子にしては珍しく、トーマが採った虫を興味深そうに覗きこんだり、触つたりする。

「怖くない？」

トーマが遠慮しながら小さなアマガエルを見せた時も、にじにじしながら、

「全然。かわいい」

と、自分の手のひらに乗せてみせた。

「今の学校に来るまではじょつちゅうこんな事してたから。久しうり」

「今の学校つてことは、引っ越しして東京に？」

トーマが何気なく尋ねると、琴音の顔に一瞬戸惑いの色が浮かんだ。

「……うん。とんでもない田舎から東京に来たから……。すじくびつくりした！」

すぐに明るい口調に戻ったが、タケルはちらりと琴音の横顔を見た。

トーマは気がつかなかつたようだが、一瞬、琴音の心が動搖したことがタケルに伝わってきたのだ。

タケルは一人から少し離れたところでリフティングの練習をしながら考えていた。

琴音には何か秘密があるに違いない。それが何かはわからないが、どうやら他人にはあまり知られたくない事である事は確かだつた。この一週間、琴音の様子を見ていたが、時々琴音から不思議な波を感じるのだ。それは自分が予期していないような質問をされた時や、びっくりした時などに伝わってくる。その波は今まで周りの人間、家族やトーマ、クラスメートがびっくりした時などに感じるものとは全く質の違つたものだつた。

その違和感は少し危険な匂いがする。動物的な直感とでも言うのだろうか、理由はわからないがタケルの中の本能の部分がそうさせやいでいるような気がしていた。

タケルの不安をよそに、トーマはどんどん琴音に引き寄せられていく。それが手に取るようになるだけに、タケルは自分の不安をトーマに言えないのだ。こんな事をいつたらきっとトーマは怒るだろう。自分にとつて大切な兄弟のような親友を怒らせるのはこわかつた。今のタケルにとつては誰よりも信頼できる友達なのだ。

「タケルくん！」

琴音の声にはっと我に返る。いつの間にかトーマの姿が消えていて、琴音がタケルの傍に立つていた。

「あれ？ トーマは？」

「お手洗いだつて」

タケルは地面に転がっていたボールを右足でひょいとすくい上げ、手で受けた。

「すごい」

琴音が目を丸くする。

「ジャグラーミたい」

「いやあ、それほどでも」

さつきまでの琴音に対するほのかな不安はどこへやら、タケルは思わず照れる。おだてにはからつきし弱いのである。

「サッカー上手いのね。もう随分長くやつてるの？」

「サッカーラブに入つたのは一年だけど、保育園の頃から父ちゃんがボール蹴りやつてたかな」

「じゃあ、将来はサッカー選手だ」

「うーん、ま、なれればいいけどね」

タケルはボールを地面に落とし、軽く蹴りながら日陰へと移動した。そこに腰をかけると琴音もその隣に腰を下ろす。

「琴音ちゃんはスポーツとか得意な人？」

「……だめ。どんくさいつていつも笑われる。ぼーっとしてるから、周りのスピードについていけないの」

琴音は小さく笑うと肩をすくめた。

「小さい頃から、あんまり同じ年頃の友達がいなかつたんだよね。小学校に入つてからも、なんか上手く話せなかつたりで……。だからトーマくんとタケルくんがすくへりやましい……」

「……なんだ」

琴音の顔には寂しそうなほほ笑みが浮かんでいる。大人の女ならともかく、十一歳の子供には似つかわしくないほほ笑みだ。その途端に、タケルの脳裏に映像がフラッシュのようにちらつく。

小さな子供達が遊んでいるのを少し離れたところから眺めている琴音。一緒に遊んでいる友達を大人が慌てて連れて行つてしまつ。まるで琴音から逃げるかのように……。

頭の芯がちりちりと痛む。タケルは思わずこめかみを押された。

「大丈夫？」

琴音がびっくりしたように覗き込む。

「大丈夫……。太陽に当たりすぎたかな」

タケルはどっさりその頭痛を太陽のせいにした。見てはいけないものを見た、琴音に悪い事をした、そんな気持ちが湧きあがつくる。

「ずっと直射日光に当たつてるからよ。頭冷やす？」

立ち上がりかけた琴音を慌てて止める。

「大丈夫大丈夫。これくらいなれるから」

「お？ と琴音は心配そうに再び腰を下ろした。

「ねえ、試合とかつてよくあるの？」

琴音はふいに明るい口調で聞いてきた。

「うん。しそつちゅうある。練習試合とか交流試合とか、毎月なんかあるね。公式試合だけでも年に五、六回はあるかな。そういうや、次の日曜日も試合だ」

隣の市のサッカーチームとの交流試合だ。

「出るの？」

「うん。一応レギュラーだからね」

ちょっと自慢気にタケルは鼻の下を指でこすつた。実際、選抜メンバーの時でもたいていはレギュラーに入っている。今度の試合はチームの六年生が全員出場する予定なので、当然タケルも入つている。

「こここのサッカーグラウンドでするんだ」

タケルは木立の向こう側を指さした。へえへつと言いながら琴音が指の方を眺めた。

「一度見てみたいな。サッカーの試合」

琴音のつぶやきを聞きながら、タケルの視界にトーマが小走りに戻つてくるのが見えた。

「じゃあ、トーマと一緒に見に来る？ でも、言つとくけど、暑いよ」

「うん！」

琴音は嬉しそうに言つて、一マ回転して手を振つた。一マが少し離れたところから顔を上気させながら手を振り返した。

へへへ
続へへ

日曜日は曇つていて、午後からは雨が降るという予報だった。タケルは一人でグランドへ来て、ウォーミングアップをしていった。試合は十時からだが、一時間前には来てウォーミングアップするのが習慣だ。

軽く身体を動かしていると、いい感じでエンジンがかつてくる。リフティングを何回かしてから高くボールを上げて、胸に当てる落とす。

軽くドリブルをしながら「ゴールに向かつて蹴りこむ。

ボールは高く上がつて綺麗な弧を描き、ゴールネットを揺らした。

「まあまあだな……」

タケルは咳くと自分のボールを取りに行く。蒸し暑い天候だが、身体の動きはまずまずといったところだ。

コーチが集合の号令をかける。

そろそろ試合が始まるようだつた。タケルは自分のボールを足で軽く蹴りながらチームメートの元へと向かつた。

「今日も頼むぞ、タケル！」

チームメートがタケルの尻をポンと叩く。タケルは自信ありげな表情で親指を立てた。

センターラインに沿つて選手達が並ぶ。

夏の重い空気を切り裂くように、鋭いホイッスルの音が鳴り響いた。

トーマは北口の花壇の縁に腰をかけ、琴音を待っていた。待ち合わせ時間は十時だったが、既に二十分が過ぎている。

「どうしたんだろう……」

腕時計をちらちら見ながら、落ち着きなく辺りをきょろきょろと見回す。途中で事故にでもあったんじゃないか……などと、そんな

不安まで湧きあがつてくる。

「あ、来た」

思わず立ち上がる。交差点の向こうで琴音が手を振っている。信号が青になると、駆け足でこちらに向かつてきた。

「じめんなさい、遅くなっちゃった！」

琴音は息を切らしながら両手を合わせて謝った。

「つうん、大丈夫だよ。そんなに待つてないし」

デートで待たされた男が口にする常套句だ。トーマにとつては二十分待たされたことよりも琴音が走つて来てくれた事の方が嬉しい。「このところ出歩き過ぎって、おじさんに注意されたばかりだったから、家を出るタイミングがなかなかつかめなくて」

親戚の家に滞在中という琴音は、外出する時、どうやらその親戚の目を盗んで家を出てきていたようだった。よほど良家のお嬢さんなのだろう。

「大丈夫なの？ 怒られない？」

「うん。怒られることはない。……と思つ」

琴音はペラつといたずらっ子のように舌を出した。

「じゃ、行こうか」

「うん」

一人は公園の遊歩道を歩きだした。

一人の姿が消えるのと入れ違いで一台の黒い車が北口の前に停車した。後部座席から男が一人降り立つ。一人はまだ若い、二十代前半だろうか、鋭い目をした男である。もう一人は五十代くらいの痩せた、陰気な目をした男だった。

「間違いないな

「はい」

一人は顔を見合わせると小さく頷いた。

› 続く

トーマと琴音がグランドにたどり着くと試合は既に始まっていた。白いゼッケンのチームと、青いゼッケンのチームが激しくボールを奪いあつていて。

サッカーランドを取り囲んでいるコンクリートのひな壇の一番上の段に一人は立つて、白と青が入り乱れて動き回っているコートを見た。

「どつちがタケルくん？」

「確かに今日は青色つて言つてたけど……」

トーマはきょろきょろと視線を走らせる。

「あ、あれ、あれ。今ボール蹴つて走つてる」

トーマが指を差すと、琴音は声を弾ませた。

「わあ、速い！。すごい、タケルくん！」

タケルは鋭い動きで右左に方向を変えながら、たくみにボールを運んでいく。

「後ろにボール蹴つた！ すごい。なんで後ろに仲間がいるつてわかるんだろ。それもあんな全力疾走で走つてて」

琴音は目を丸くする。トーマは笑いながら腰を下ろした。琴音もそれにならう。

「だいたいわかるつて、タケルが言つてた」

タケルは他の人よりも勘が良い。それは彼の特殊な能力の影響もあるのだろう。

ゲームは前半が終わりそうだった。まだ双方とも無得点だが青チームが少しばかり押しているようだ。

琴音はサッカーのルールをよく知らないようなので、トーマは解説を入れながら一生懸命応援した。

二人ともすっかり試合に熱中していたので、背後には人の気配がしている事に全く気がつかなかつた。

いつの間にか男が一人立っている。北口から一人をつけて来ていた男達だった。

「琴音さん」

若い方の男が田の前の琴音に声をかけた。

琴音の動きが一瞬止まる。

「探しましたよ」

男の声はそつとするほど冷たく、ひとかけらのぬくもりも感じられない。

トーマはようやく後ろの一人の存在に気が付き、慌てて振りかえった。一メートルと離れていない所に男が一人立っている。手を伸ばせばすぐにでも届きそうだ。

琴音は振り向かずにゆっくりと立ちあがる。

「！」、琴音ちゃん？』

トーマも思わず立ちあがった。そして琴音と一人の男を交互に見る。両者の間に流れる空気はとても親密なものとは言えない。

琴音は振り向くことなく口を開いた。

「……しつこい。私は帰らないと言つたはずよ

その声は今までに聞いた事がないほど冷たく強い口調だった。トーマはびっくりして琴音の横顔を見る。

うつむき加減で半眼になり宙を見つめている。両手は固く握りしめられ、小さく震えているほどだった。今の今まで無邪気にタケルの応援をしていた琴音ではない。まるで別人のようだ。

「あなた達のバカげた計画に興味はない。でも、お兄様の手助けもしない。とにかく、これ以上は関わりたくない。何度も言わせないで下さい」

琴音の身体から怒りが霧のように立ち上っているのがわかる。人間がこれほど静かに怒りを燃え上がらせる事が出来るなんて、今まで考えた事もなかつた。

気圧されたトーマは思わず一歩、下がる。

「待ちなさい」

もう一人の男が穏やかに声をかけた。

「すぐにブチ切れて怒りを撒き散らすのはいい加減に押さえなさい。そろそろ制御する事も覚えたはずだ。そのための東京生活だったのだからね」

男はじりじりと琴音に近づいてくる。

「こんなところでのんきにサッカー観戦している御身分ではないことは、自分が一番よくわかっているだろう。君には拘つべき役割がある。それが君の宿命だ」

「聞きたくない！」

琴音が叫んだ。

一瞬何か熱いモノが勢いよく放射状に琴音からはじき出されたようには感じた

思わずトーマはよろめく。

その手を男がぐっと掴んだ。

「わ？！」

そしてそのまま自分の方へと引き寄せ、トーマの首に腕を巻きつけた。

「やめなさい！ 君のボーカイフレンドが黒こげになつてもいいのか？」

「ここは大人しく私の言う事を聞く方が賢いと思わないかな」

トーマは首をぎりぎりと締めあげられ、もがいた。細くて貧相な体つきのくせに、男の力は強く腕はなかなかほどけそうにない。

頸動脈が締められて、頭が熱くなつてくる。

なにがどうなつてているのかわからない。が、とにかく信じられないくらい、危ない状況になつてているだけはわかる。そしてこのまでは取り返しのつかない事になりそうだ。

「く、くるじ……」

トーマは死に物狂いでもがいた。トーマの悲壮な声に初めて琴音が振り向く。

「トーマ……くん」

ふいに琴音の瞳の表情が見慣れたものに変わる。

「根岸さん、やめて！」

「いやいや、この少年は私達の盾だ。どうやらこの子がいれば、君は自制してくれそうだからね」

「卑怯者……」

琴音の瞳に殺氣立つた光が宿り、きつきつと怒りが再び高まる気配がする。

「やめなさいと言つたろ？」

根岸の腕は再びトーマを締めあげる。トーマは真っ赤な顔でもがいている。

「言つておぐが、私は平和主義者でね。人が苦しむのを見たいとは思わないんだよ。でも、君があんまり言つ事を聞かないと保証はない」

「……」

琴音は根岸とこうその男を睨みつけていたが、やがて静かに目をつぶつた。トーマの身の安全には代えられない。そう思つたのだろう。

「さあ、そろそろ行こうか

琴音があきらめたのを見てとつた男は若い男の方を見た。若い男は小さく頷くと琴音の横に立ち、その腕をつかんだ。琴音はその腕を払いのけ、きつい視線で男を睨みつける。一瞬男がひるんだが、トーマのうめき声に琴音ははつと我に返つたようだつた。

「行きましょうか、琴音さん」

男は再び琴音の腕を掴み、ぐいっと引っ張つた。

グランドで前半終了のホイッスルが鳴り響いた。タケルはボールを追いかけるのを止め、ベンチに向かう。頭から水をかぶつたように汗が流れている。目に入りそうになつた汗を腕でぬぐつた時だつた。

頭の中に“声”が響いた。

タケル！
助けて！
殺される！

> 続く <

タケル！ 助けて！ 殺される！

その強さにタケルは思わず一瞬頭を抱えた。その“声”は明らかにタケルを呼んでいた。

「トーマ？」

頭を押さえながら慌ててタケルは辺りを見回す。トーマの悲鳴はがんがんとタケルの頭の中に鳴り響き続いている。助けて！ 殺される！ そのフレーズが強くなったり弱くなったりしながら、繰り返されるのだ。

「トーマ！」

ただ事ではない。何かわからないがトーマの身に危険が迫っていることは確かだ。

「トーマ！」

ベンチの近く？ いや、いない。ゴールの方？ 違う。観客席？ タケルはトーマの悲鳴が発している方向を探した。

「？！」

コンクリートのひな壇の上だ。男が一人、トーマと琴音を引きずるようにして連れて行く。

四人の人影が壇を登り切り、木立の向こうの遊歩道へと消えた。

「トーマ！ 琴音！」

とつさにタケルはそちらの方へ向かって走り出していた。

「おい、こら！ タケル！」

コーチが慌てて引き留めようと声をかける。

「すんません！ ちょっと、トイレに…！」

タケルはそのまま走り続けた。

コートを突つ切り、ひな壇を駆けあがる。

「トーマ…」

タケルは叫びながら、全力疾走で遊歩道へと飛び出した。勢い余つて横滑りしながら停ると、前後を見た。

「どっちだ？」

田を閉じてトーマの意識を探す。トーマ、トーマ、何があった？ ど二だ？

タ・ケ・ル……。

トーマの“声”がした。今にも消えそうな頬りなげな“声”だ。

「こつちか？！」

タケルは駆けだした。

嫌な予感がする。何かとんでもない不吉な予感がタケルを駆り立てていた。

ざわざわと遊歩道沿いの木々がざわめく、暑くて重い風が邪魔をするようにタケルにまとわりついてくる。

「トーマー！」

タケルは無我夢中で走った。

遊歩道から北口へと出た。

タケルは膝に両手をついてぜえぜえと息をしながら広場の隅々に視線を走らせる。

「いた！」

黒い車が歩道沿いに停車していた。その後部座席にトーマが押し込められるのが見えた。

「トーマー！」

タケルは叫びながら、そちらに向かって走り出す。

トーマに続いて押し込められようとしていた琴音が、タケルの声に気付いて振り向いた。

「タケルくん！」

「トーマー！」 琴音！

タケルは必死で走る。が、間に合わない。琴音は乱暴に車の中に

引きずり込まれてしまった。バタン！ と扉の閉まる音が響く。

「待てよ！ おい！ トーマ！」

タケルが車の傍にたどりつくと、車が発進するのはほぼ同時だつた。

車の側面に手を着いたとしたタケルは、勢い余つて車道に転げだしそうになる。

「！」

その途端に、何かに強く引っ張られるような感じがして身体が歩道に向かつて引き戻された。

そのまま勢いよく歩道の上にひっくり返り、じろじろと転がる。

「死にたいのか？」

誰かが強い口調で言いながら、駆け寄ってきてタケルの腕を取つて無理やり立たせた。

タケルはその相手を見た。

三十代くらいだろうか、濃紺のスース姿の大柄な男だつた。サングラスをしているが、ギリシャ彫刻のような彫りの深い整つた顔立ちであることがわかる。

白いワゴン車が滑り込むように一人の前に停まる。

「竜介！」

助手席の窓が開いて、声が響いた。タケルの腕を掴んでいた男は、「ああ」と短い返事をするとタケルの腕を離した。

「じゃあな」

と、車に乗り込もうとした時、再び声が飛んだ。

「君も乗りなさい！ 琴音を追いかける」

タケルは反射的に白い車の後部ドアに飛びついた。

「こんなガキ連れてつてどうする気だ」

スース姿の男、竜介は助手席に乗り込むと運転席の男に非難めいた視線を投げかけた。

タケルが後部座席に乗り込むや否や、車は勢いよく発進した。

> 続 < <

乗り込んでから急にタケルは不安になる。声をかけられてとつさに身体が動いて乗り込んでしまったが、この一人の正体すらわからない。琴音の知り合いであることは確かのようだが……。

ハンドルを握っているのはやはり三十代くらいの男だった。後ろからでは顔は見えないが、竜介とは違つて体つきはそれほど大きくなく、少しなで肩気味のほつそりした感じだ。

その男がちらつとルームミラー越しにタケルを見た。

「琴音と最近ずっと一緒にいた子のうちの一人だよね？」

「……はい」

「そう。なんだか最近、琴音が随分楽しそうだつたから。この一週間くらいかな、琴音が子供みたいな顔で笑うようになつたのは。彼女にもちゃんとこんな顔が出来るのかつて、ほつとしたよ」

タケルは目をぱちぱちさせた。

「琴音は今僕の家に住んでる。預かっているといつた方がいいかな」という事は、このハンドルを握っている男が琴音の親戚のおじさんという事か？ タケルは少し安心した。

男はくすつと小さく笑う。

「で、なんでこんなガキと一緒に連れていくんだ。足手まといだ」

竜介は助手席でむすつとしている。

「ガキガキ言うな！ おっさん！」

タケルは身を乗り出して大声で怒鳴る。おっさん呼ばわりされた竜介は目が点になつた。

「トーマが助けてって言つてたんだ！ 教えてよ！ どうなつてるんだ！」

竜介は耳を押さえて顔をしかめた。

「つむわーー 耳元でデカい声出すな。それと、俺はおっさんじゃない」

「うるせー！ 三十過ぎたらおっさんで充分だ、おっさん」
タケルはムキになつて吠える。運転席の男がくすくすと笑いだした。

「竜介の負けだな。小学生から見たら僕らは立派なおっさんだよ」
竜介が嫌そうな顔でタケルを横目で見た。誰がおっさんだ……と
いつ抗議の独り言がタケルの頭に届く。

運転席の男はまあまあと竜介をなめた。

「この元気なボクをあのままほつたらかしていたら、間違いなく警
察を呼んだらうよ。今、連中が来たら、また話がややこしくなる」

「……まあ、それはそうだが」

竜介は苦々しく咳いた。

「それに、竜介、偶然だらうか、必然だらうか、僕らはすごい捨
物をしたかも知れない」

唐突に運転席の男が言つ。

「君、テレバスなんだよね？」

「なにい？」

竜介がびっくりしてがばっと振り返る。タケルは一瞬何を言われ
たのかよくわからず、きょとんとした。

「君がタケルくんなんだね？」

畳みかけるような男の質問にタケルはおずおずと頷いた。何故俺
の名前を知つている？ いや、それよりも何故俺がテレバスだつて
知つているのか？ 頭の中が混乱してきた。

「さつき、琴音と一緒にさらわれた子がや、トーマくんって言つの
？ 君を呼んでた」

「……」

タケルは目をぱちぱちさせた。確かにさつきトーマは自分を呼んでいた。俺はその声を頭で聞いたはずだつたんだけど……。あれはトーマが本当に叫んでたのか？

「いや、そうじゃないよ。他に彼の声を聞いた人はいない。それは間違いない。明らかにトーマくんは君が自分の声を聞き取つてくれ

るとわかつて呼びかけてた。心でね

「……ええええ？」

タケルは思わずのけぞつた。なんでこの男はそんな事を言いだすんだ？ 心で呼びかけていたという事が、何故この男はわかるのだろうか。普通の人間ではあり得なかつた。そう、テレバスでもない限り、そんな事が出来るはずもない。

「いやあ、実はさ、僕もテレバスなんだよ

運転席の男は愉快そうに笑いだす。

「琴音の意識をトレースしていたら、トーマくんの悲鳴が聞こえてね。まさかそれに反応する人間がいたとは……。類は友を呼ぶつて、本当にあるんだね。正直僕も驚いてる」

なにがなんだかよくわからないが、どうやらこの男もタケルと同じような能力を持っているらしい。まさか琴音の親戚がテレバスだつたとは……。

「ああ、僕ね、琴音のおじさんでもなんでもない、赤の他人。中辻一平と言います。琴音の、まあ、言つてみれば身辺警護みたいな事をしてゐるわけで。で、これが相棒の高野竜介。竜介はサイコキネシス、念動力を操る。君がさつき車道に飛び出しそうになつた時、後ろに引っ張られただろ？ あれがそうだ」

「あ、あれ？！」

タケルは歩道に引き戻された時の感触を思い出した。そうだ、言われてみれば誰もいないのに強く後ろにひっぱられたのだった。

「わあああああ、もう、何がなんだかわからない！」

タケルは両手で頭をかきむしり、思わず叫んだ。そして大きな溜息をつく。

「うーん、ちょっと刺激が強すぎたかな。頭がパンくつてるみたいだね

一平は苦笑いした。

竜介とは対照的に、どこまでも穏やかで優しい物言いだ。ミラー越しなのでよくわからないが、目がずっと笑っている。

「お前の友達とやらもサイキックか？」

竜介が首だけこぢらを向けた。

「トーマはそんなんじやない。でも、俺がテレパスだつてことは知つてゐし、よく相談にも乗つてくれて……」

「小学生のくせに生意氣な……」

竜介はふんと鼻を鳴らす。よく出来たガキなんて口クなモンじやねえ……。そんな呴きが聞こえてくる。この男、相当屈折しているようだ。

「あのお嬢さんもラッキーだな。類は友を呼ぶ、か。サイキックと、心の広いノーマルがボーアフレンドとはね」

「そんなんじやないよ！」

タケルは口をとがらせて抗議した。が、ふと心に疑問が浮かび上がる。

「あの、琴音は？ あの子もテレパスなの？」

一平と竜介が一瞬顔を見合わせる。

「読んでみろよ、俺の頭の中を」

竜介がにやりと笑つて、腕を組んだ。

♪ 続く ♪

< ;5 > ; (後書き)

ま～まだ続くのであります（笑）。

ちくしょう、試してやがる。タケルは一瞬むつとしたが、一つ大きな深呼吸をすると目を閉じた。

意識を集中する。もやもやとした頭の中に囁き声のような言葉が響いてくる。

「……パイロ……キ、ネシ、ス？」

タケルは聞きとった言葉をそのまま反芻する。なんの事だかさつぱりわからないが、確かにそう聞こえた。

ひゅう~と竜介が口笛を吹き、一平が満足げに頷く。

「そう、パイロキネシス」

タケルは恐る恐る聞いた。

「パイロキネシス……って、何？」

「発火能力保持者。琴音は火を操る」

「火？」

「そう、琴音は精神の力で物を発火させることが出来る。ただし、彼女がその能力を発揮するのは怒りが頂点に達した時だ。烈火のごとく、という言葉があるが、まさにその通り。でも、そういう精神状態での現象だからね、コントロールがなかなかできない。それに彼女がパイロキネシスとしての力を発揮する時は、別人格になつているようだね」

「別人格？」

タケルは首をかしげる。

「簡単に言えば二重人格、かな。ジキルとハイドって知ってる？」

「……知らない」

「あ、そ」

一平はかくんつと首を傾け、竜介がふつと吹き出した。

「そうだな……。君が知っている琴音ってどんな子？」

「え……大人しい、優しい、のんびりした」

タケルは琴音の色々な表情を思い出した。祭の夜の怯えたような、不安げな表情。アマガエルを手のひらに乗せて、愛おしそうに見つめていた表情。トーマの話に瞳を輝かせている表情。なんの事はない普通の女の子だ。いや、普通の女の子よりもずっと素直な子だと思う。

「そう、だね。でも彼女の中にはもう一人の琴音がいる。それは言つてみれば、炎のような、激しい怒りの塊のような……」

怒り狂う琴音の姿など想像できない。しかし、思い当たることがあつた。彼女が動搖した時に感じる妙な違和感だ。普通の人には感じたことのない妙な感覚だつた。

「そう、それは多分琴音の中のもう一人の琴音の気配だろ?」

一平は運転しながらタケルの心の中の声に答えていく。

「普段はその子は出てこない。でも、彼女が危険にさらされた時や、激しい怒りを感じた時にふいに表に出てくる……」

心の中に住んでいるもう一人の琴音。タケルにはまったく理解できなかつた。自分の中に別の自分がいる。そんな事があるのだろうか。どんな感じなんだろうか。

窓の外の景色は見知らぬ街の風景に変わつていく。やがて高速の入り口が見えた。まだまだ走るのだろう。

琴音とトーマを乗せた車はタケルの場所からは見えないが、どうやら一平も竜介も行き先の見当はついているらしい。

しばらく続いた沈黙を破つたのはやはり一平だつた。

「彼女のそんな能力を良からぬことに利用したいと思う大人がいてね……。呪いの炎つて話、知つてる?」

「呪いの炎?」

タケルは首をかしげた。

「何、それ。怖い話? あのさ、俺、自慢じゃないけど、……その手の話、苦手なんだよね」

思わず顔をしかめてしまう。トイレの花子さんだと、音楽室のベートーベンが動くだと、学校の廊下の鏡に吸い込まれるとか、

そういう話は嫌いだ。昼間はいいが、夜になると想いだして怖くなる。夜中にトイレに行く時には絶対に洗面所の鏡は見ないことにしているのだ。

「安心しろ。お前みたいな可愛げのない騒々しいガキのところに幽霊なんぞ出やしない。あちらも相手を選ぶ」

竜介の言葉にタケルはガルルル……と鼻の頭に皺を寄せた。

「怪談じみた話ではあるけどね。最近東京で流れ出した噂、だよ」

一平が話を戻す。

「東京で若者の焼身自殺が増えているらしい。でも実は自殺じゃなくて、呪い殺されたんだつていう噂だ」

「呪い殺される？」

タケルは思わずゴクリと喉を鳴らした。呪いなんて言葉は耳にするだけでもヤバい感じがする。

「その噂の出所と、琴音が関係している。……まあ、今はこのくらいにしておこうかな。あんまり詳しく言つても、君の手に余りそうだから」

困惑しているタケルの様子を見て、一平はにっこり笑つた。そして小さな溜息をつく。

「僕らのようにほんの少し他人と違う能力を持つ者は、過酷な運命と向かいあわなきやならない時がある。琴音は今までにその真っ只中にいる……」

にわかには信じられない話だつた。要するに琴音はパイロキネシスという超能力者で、その能力を悪用しようとしている人間に追いかけまわされている。そしてこの一人が琴音の身辺警護をしていて、ついでにこの一人も超能力者だという。

そんなんばかばかしい話は聞いたことがない。まるでマンガかアニメの世界だ。しかしタケルにはそんな話でもどこか納得できるところがあった。なぜなら、タケル自身がテレパスなのだから……。自分がテレパスであるという事実を否定する事は出来ない。自分があり得て、他人はあり得ないなどという事はないのだ。

不安が押し寄せてくる。それは生まれて初めて感じる不安だつた。その気持ちを一平は読んだのだろう。ミラー越しにタケルを見た。「こんな話、急に聞かされたらびっくりして当然だ。悪かったね。大丈夫。トーマくんと君の家族へは僕らの上司から連絡してもらうから。今はとにかく、琴音とトーマくんを追いかけたい」

「うん」

タケルは小さく頷いた。一平から伝わつてくる波動に疑わしいものは感じない。この二人は信じても大丈夫。タケルの本能はそう言つていて。タケルの不安はこの二人に対するものではないのだ。もつとぼんやりした、形のない不安。だが、それが何なのか、自分でよくわからなかつた。タケルはこつんと頭を窓ガラスに当ててそのままもたれた。

「俺達、どこに行くんだろ……」

タケルは小さく呟いた。

› 続く

龍の伝説 <1> (前書き)

サッカーの試合を観戦していたトーマと琴音が謎の二人の男に誘拐された！トーマの心の叫びを聞いたタケルは試合をほつたらかして、二人の後を追う。二人は車に連れ込まれ、タケルは追う術を無くす。そんなタケルの前に竜介と一平というイケメン・サイキックが現れた。一人に連れられて、タケルはトーマと琴音の後を追う。

トーマの目が覚めた。鼻の奥が痛いくらいにスースーしている。朝礼で貧血を起こしかけた時のような感覚だった。視界も薄い黄色がかかった靄に覆われているようで、はつきりしない。

何やら振動が伝わってくる。それが何かのエンジンの振動だと気がつくのにだいぶ時間がかかった。

一体自分はどこにいるのだろう……。何が起きたんだろう……。ほんやりと考えながら目をこすってみる。

かすむ視界が徐々に晴れてくるとようやく自分が車の中にはいることが理解出来た。車の中？ なんで車の中にはいるんだろう……。ふいに稻妻が走るように先ほどの情景が蘇ってきた。そうだ、自分は見知らぬ二人組の男に襲われて、拉致されたんだ。

トーマは飛び上がった。

途端に隣に座っていた男に抑えつけられる。

「トーマくん！」

琴音の声がびっくりするほど近くで響く。はっとそちらを見る

と、息がかかるような距離に琴音の顔があった。

「わ？！」

「良かつた……。ぐつたりしてたから、どうなつちやうのかと思つた」

琴音は湖のような瞳に涙をいっぱい溜めてトーマを見ている。今にも堤防は決壊しそうだ。

「余計な事を喋らない」

冷たい声が一人を制し、琴音は眉間に辺りに怒りを溜めながらも押し黙つた。

後部座席に一人は座らされていた。一人の両脇には根岸と若い男が座っている。運転席にはまた別の若い男が座っていて、ハンドルを握っていた。

車は高速道路を走つて いるようだつた。

高い壁の向こう側には濃い緑の木々が見える。随分と山の中を走つて いる道路のようだ。道路の脇に立つて いる標識から、トーマと琴音を乗せた車が県境を越えた事がわかつた。

「どこに行くんですか」

トーマは恐る恐る隣に座つて いる根岸に聞いてみたが、根岸はちらつと視線をよこしただけで答えない。

「……火王村。私の生まれたところ」

琴音が小さい声で答えてくれた。

「余計な事を喋るなと言つたはずですが」

琴音の隣の若い男が再び一人を制する。

琴音は鋭い視線を男に投げつけた。男の顔に一瞬怯えの色が浮かぶ。

「わかつて るな、余計な事をするとこの少年がとばっちらりを受ける根岸が窓の外を見ながら琴音に釘をさす。琴音は膝の上に置いた両手を固く握りしめながら目を閉じた。

トーマは少し首を傾けて、前方の景色を見つめた。
まずは自分が置かれているこの状況をなんとかしつかり理解しなくては……と、トーマは頭をフル回転させる。緊急時であればある程、情報を集めて、冷静に分析しなくてはダメだ。看護師をしている母からいつもそう教わつて いる。

この男達が捕まえたかったのは間違いなく琴音だ。そして、この男達が琴音を恐れているということは明らかだつた。自分は琴音を大人しくさせるための道具としてここにいる。なんだか情けない気分だ。護るどころか足手まといになつて いるような気がする。

しかし何故、大の大人が琴音を恐れるのか。たかが小学六年の女子ではないか。琴音になにがあるというのだろう。そして自分達はどうなるんだろう。もしかしたら殺されてしまつたりするのだろうか……。

トーマは小さく身震いした。じわじわと恐怖が心の中で大きくな

つていいく。そんな自分の心に必死で言い聞かせる。焦つちやだめだ。焦つちや。希望の光がない訳ではないんだから。

拉致^{らしゆ}される時、必死でタケルに呼びかけた事を覚えている。タケルがその声に気付いてくれていたら、もしかしたら警察に連絡してくれるているかもしれない。いや、車にひきずり込まれる時、微かにタケルの声を聞いたような気がした。タケルはきっと気付いてくれているはずだ。そして、必ず何か手を打つてくれている。

大丈夫さ。だつて、タケルだもん。あいつならきっと助けてくれる。きっと……。それまで僕はなんとかして自分と琴音ちやんを守りきらなきや……。

トーマは手のひらにこじむ汗をペロリとズボンで拭いた。

サービスエリアで休憩することもなく、車はひたすら走り続けた。サービスエリアで琴音に逃げられる事を警戒しているのだろう。とにかく一刻も早く田的^{たてき}地に着きたいようである。

結局県境を二つ越える事になった。ようやく車が高速を降りたのは三時間以上経つてからだった。

山々の間に田畠があり、道沿いに古ぼけてくすんだ家々がぼつぼつと並んでいる。そんな田舎の風景の中を車はさらに山奥に向かって走つていいく。

まばらだった家もそのうちほとんどなくなり、つづら折りの急こう配の山道が延々と続く。

運転席の男がエアコンを切り、窓を開けた。木々の濃い匂いが冷たい湿つた空気と共に車内に流れ込んでくる。重苦しく息苦しかったトーマは少し生き返った思いがした。

イヤが砂利を踏む音と、甲高いセミの声が聞こえる。太い杉の幹が並んでいるのによくわからないが、片側は谷に向かっているようで、かすかに水の音が聞こえた。

いくつか峰を越えたようだった。

急に視界が開けた。雲間から射す太陽の光に、薄暗い山道で慣れ

ていた目が痛いくらいだった。一瞬顔をしかめたトーマは窓の外をみて思わずうわっと小さく声を上げた。

山と山の間に川が流れ、川に沿つて縁の田が広がっている。豊かに波打つ稻は小さな緑色の穂を覗かせている。

幾つかの古い家屋が山の縁に呑み込まれそうになりながら並んでいる。古い立派な瓦屋根に白い漆喰の壁の典型的な日本家屋だ。中には苔へこけくむした茅葺へかやぶきくの屋根も見える。

日本の田舎の手本のような景色だった。こんな風景はテレビのドキュメンタリーでしか見た事がない。この場所だけ時間が流れていない。そんな印象すら受ける。

車はゆっくりと集落の中を進んでいく。古い橋を渡り、再び山に向かう道へと進む。その途中に大きな石の鳥居がそびえていた。

鳥居の手前の空き地でようやく車は停まった。

根岸に促され、トーマと琴音は車を降りた。

トーマは鳥居を見上げた。

「いは……」

「火王村。ここは火王神社」

琴音が重い口を開く。

「私の……生まれたところ」

「そう、琴音は火王神社の富司の娘だ」

根岸はそう言つとトーマの腕を掴んだ。

「さあ、行こ。これからやらなければならない事は山ほどあるんだから」

そして顎をくいっとしゃくつて一人の男達に合図をした。二人は無言でうなずくと、琴音を挟むようにして歩き出した。

「君にはまだまだ付き合つてもうつよ」

根岸はトーマの腕を引っ張りながらその後を追つた。

鳥居をくぐると長い石段が続いている。見上げると思わず悲鳴を上げたくなるような長さだ。

そこを延々と上がっていく。半分くらいのところでトーマは思わずへたり込んだ。が、根岸に無理やりひっぱられ、仕方なく歩き出す。

「町の子はか弱いな

根岸がバカにするようにトーマを笑った。トーマは情けない表情で前を歩く琴音を見上げた。三人とも歩みを止める気配すらない。

「……信じられない……」

トーマははあはあ言いながら歩き続けた。

> 続く <

やつとの思いで石段を登り切ると、広い境内が広がっていた。疲れ果てて倒れそうになっていたが、田の前の光景にトーマは田を奪われる。

正面には歴史を感じさせる古い大きな木造の社殿があり、その傍らには宝物殿だらうか漆喰で塗り込められた壁の大きな土蔵がある。反対側には社務所兼住宅と思しき、古い日本家屋が建てられている。いずれも長い歳月を感じさせるたたずまいだ。

社殿の後ろは岩盤がむき出しになつていて崖がそびえていた。その上方には黒い洞窟がぽつかりと口を開け、しめ縄がかけられていた。洞窟と社殿は長い木造の階段でつながっている。社殿の奥から洞窟に上がるようだ。まるでこの洞窟を護るかのように神社が建てられているように見える。

静かで、身の引き締まるような厳かな空気が張り詰めている。パワースポットなどという言葉をよくテレビで聞くが、まさにここに何かの力があると感じさせた。

「あれは……？」

社殿の中に何か大きなものが祀られているのが見えた。暗くてよくわからない。トーマは汗でずれてきた眼鏡を押し上げて目をこらす。

薄暗い社殿の中にあるのは大きな龍だつた。黒く変色した、木彫りの巨大な龍がこちらを見ている。口を開け、らんらんと田を光らせた龍。一瞬龍の息遣いが聞こえるよつた気がした。

「……龍？」

「そう、ここは龍を祀っている」

「え、でも、火王神社って書いてますよね？ 龍って水の神様なんじゃないんですか？」

トーマは根岸を見上げた。根岸はちらりと横目でトーマを見る。

「変わってるな、君は。自分がどうこう状況にあるのかわかつて
だろう」「元

「……はあ、『変わってる』とはよく言われます」

「普通は怯えて泣き叫びそうなもんだがね」

「怖くない訳じゃないです。怖いです。……でも、不思議だなって
思つて」

根岸の頬に薄く笑みが浮かんだ。

「君は学者肌のようだね」

「はあ」

「あれは、火を吐く龍だ」

「火を吐く……」

トーマは暗闇の中で目を光らせている龍を見つめた。むくむくと
持ち前の好奇心が湧きあがる。が、

「残念だけど歴史の勉強はここまで。来なさい」

根岸がぐいっとトーマをひつぱつた。

社務所の裏手にまわると比較的新しい作りの民家の玄関に辿りつ
く。

中に入ると広い土間があつた。土間をそのまま突つ切ると裏庭に
出る。苔の生えた大きな庭石や石灯籠に、緑色に濁った小さな池、
綺麗に手入れをしたら立派な日本庭園だろう。が、まめに手入れさ
れている様子はなく、雑草があちこちで生い茂り荒んだ印象がある。
庭の奥には小さな土蔵がある。トーマと琴音はその土蔵の中に放
り込まれた。

「しばらくここで待つてなさい」

根岸は無情にそう言い放つと扉を閉めて、外から鍵をかけた。

暗闇と静寂が一人を包み込む。

物騒な大人がいなくなつたという安堵感からトーマはほうつと大
きな溜息をついた。

「なんだか妙な事になっちゃつたなあ……」

小さく呟く。こついう時はとにかく自分が置かれている状況をき

ちんと把握しなくちゃ……。

土蔵の中はかなり薄暗いが真つ暗という訳ではなかつた。上方にある幾つかの天窓から外の光が入つてくる。

棚がいくつも壁際に並んでゐる。そこには黒く変色した木の箱や、油紙で包んだ巻物がずらりと並んでいた。この神社の長い歴史を証明するものなのだろう。きっとものすごく貴重な、価値のある物ばかりに違ひない。

床は板張りで、歩き回ると時々ざわざわと音がする。

真夏だといふにとても涼しい。閉じ込められた今が夏で良かつた。冬だつたら凍えてしまいそうだ。

「子供の頃、悪い事したらじょっちょうじこで閉じ込められた」

琴音は入口近くにある黒いスイッチを弾いた。天井からぶら下がつてゐる裸電球にぽつと灯りが灯る。

「すじい……なんか、ものすじく古いって感じ」

トーマの家には裸電球などと言つ代物はない。

「時間が止まつてゐみたいだ」

「止まつてゐるよ」

琴音は寂しそうに呟くと床の上にしゃがみこみ、棚にもたれた。トーマもその隣に座る。

一人は黙りこんだまま天窓を見上げた。光の筋がまっすぐ射し込んでくるのが見える。セミの声が土蔵の漆喰に沁みるようだ。

「じめんね……。へんな事に巻き込んじやつた」

ぽつりと琴音が言つ。

「……うん」

トーマは頷く。しばらく考えていたが、恐る恐る口を開いた。

「……なんでこんな事になつたのか、話してもうりえん……よね?」

琴音は口を閉じると、深い溜息を一つついた。そしてゆっくりと語り始めた。

› 続く

<--> ; (前書き)

囚われの鳥となつたトーマと琴音。琴音は自分の生い立ちを語り始めゐる……。

琴音の父は真山貴臣といい、この火王神社で神主を務めていた。母は鈴子という。六つ年上の兄、笙があり、琴音が三歳までは四人家族だった。

琴音には父親の記憶がない。彼は琴音が三歳の時に不慮の事故で亡くなつたと聞いている。父の死については誰も教えてくれないので、琴音は未だにその原因を知らない。父の死後、神社は母の鈴子が護つていた。

神社の後継ぎは兄の笙と決まつていたが、いつの頃からか、とある噂が氏子達の間で囁かれ始めた。

真山家の娘は龍の印を持つている、と……。

龍の印。母はその噂を打ち消そうと必死になつていたが、次第に周囲の琴音を見る目は変わってきた。

「火龍の娘だ」

そう囁かれ、恐れられながら琴音は育つた。小学校に上がつてもその噂は琴音にまとわりつき、友達もほとんど出来なかつた。

三年前、小学校が廃校になつたのを機に琴音は東京の寮のある小学校に転校する事になった。

このままでは琴音の存在が火龍教と火王村の秩序を乱す原因になつてしまつ。そして真山家と火王神社の後継者である兄の存在をも脅かす事になるかもしれない。

そんなことになる前に、琴音を村から出した方がいいと古くからの信者達が母に進言したのだ。事実、琴音を火龍教の中心にしてはどうかという声があちらこちらで聞こえ始めていた。

鈴子は迷つた。

まだ琴音は幼い。一人東京に出すなど、母親として首を縦に振る訳はない。

しかし一方で、鈴子は真山家と火龍教を護るという使命も持っていた。生まれた時からずっと火龍教の中で育った鈴子にとって、その使命は絶対的なものだった。

真山家は封じ込められた龍を鎮め続けるための血筋である。龍の印を持つ娘が後継者になるなどとんでもない話だ。そして、正式な後継者である笙の立場を守るためにも琴音は村から出さなければならぬ。悩みに悩んだ末、鈴子はそう決断したのだ。

東京での生活は驚きの連続だった。綺麗でお洒落な校舎や敷地、可愛い制服、何もかも村にはない物ばかり。外国人の生徒や先生が当たり前のようにその空間に溶け込んでいた。まるで外国に放り出されたようなものだつた。

最初は戸惑う事ばかりだつたが、だんだん琴音もその環境に慣れてくれた。周囲は琴音の事を何も知らないのだ。龍の印だの、火龍の娘だのといった余計な雜音に悩まされる事もない。自分の事を白い目で見られる事も、恐れられる事もない。親友などと呼べる存在はいなかつたが、普通に話ができるクラスメートがいるというだけでも琴音にとっては新鮮で楽しいことだつた。

このままこの学校で大きくなつていくのだろう。そして村とは全く縁のない世界で、一人で生きていくのだろう。子供心に琴音はそう感じていた。それも悪くないかもしれない。そんな風に漠然とした覚悟を持ちつつあつた。

しかし思いがけない事が起つた。今年になつて母が亡くなつたのである。その葬儀のため久しぶりに帰省した時、兄である笙の自分を見る眼の冷たさに、あらためて故郷には自分の居場所はないと実感した。

自分の存在が兄にとつて邪魔なものでしかない事はうんと小さな

頃から肌で感じてきた。兄は今、神主となり神社を継ぐための修行に入っている。そんな兄が琴音の帰省を望んでいないのは明らかだつた。経済的には援助してやると言つてくれたが、その口ぶりは琴音を完全に突き放したものだつた。一度とここには帰れない……琴音はそう思った。

そんな時、一人の男が琴音に近づいてきた。

根岸雄次だ。根岸は火龍教の裏方として長年仕切つて来た男である。まだ大学生だつた頃、研究のため火王村にやつてきた。それから二十年以上の間、火龍教の研究をしながら、神社の事務的な仕事を引き受けってきた。事実上、神社の影の主と言つても良かつた。

本音を言えば、琴音はこの男が苦手だつた。顔はいつもうすら笑いを浮かべているが、目は少しも笑つていないので。何を考えているのかわからなかつた。それでも母の鈴子はこの男を心から信頼して、全てを任せているようだつた。

その根岸が琴音に囁いた。

「火龍教はもつともつと大きな可能性を秘めている。もつとも、君がその中心となつてくれれば……の話だが」

琴音は断つた。根岸の言葉に何やら邪悪な物を感じたのだ。葬儀が終わると東京にすぐに戻つた。が、根岸はあきらめなかつた。東京にもしばしばあらわれ、琴音にしつこくまとわりつき、自分の元にこないかと誘い続けた。次第にやり方はエスカレートしていき、しまいには見知らぬ若い男がストーカーのように付きまとつようになつてきた。

夏休みが近づくと学校も寮も人気がなくなる。困つた琴音は学校と相談し、警察に届けた。

その翌日、琴音の前に一人の男達が現れた。中辻一平といつ優しそうな男と、イケメンだが近寄りがたい雰囲気の高野竜介だ。

「初めてまして、真山琴音さん。あなたの身柄を保護するために来ました。警察の者と思つてくださいって結構です」

直感でこの一人は自分と同じ種類の人間であるということを感じた。信頼とか信用とか、そういう類ではなく、本能でそう感じたのだ。

そして琴音は一平の自宅のある高乃城でひと夏を過ごす事になった。

> 続く

琴音の、長い話が終わった。

いつの間にか天窓から入つてくる光はなく、裸電球のオレンジ色の光がぼんやりと辺りを照らしていた。

琴音は膝を抱え、腕の中に顔を埋めていた。トーマはその隣で同じように膝を抱えながら天井から頬りなげにぶら下がつている電球を見上げていた。

なんだかとても切なかつた。同じ国に生まれて、同じ歳で、どうしてこんなに背負つている物がちがうのだろうか。琴音になんと言葉をかけたらいいのだろう。可哀そうとか、気の毒とか、そんな言葉をどれだけ並べたところで、琴音が抱えている重荷や哀しみをトーマはどうにもしてあげられない。

自分はどうなんだろうか。ふとそんな事を思う。

物心つく頃には母親と一人の生活になつていた。大学病院で研究者をしていた父は母と離婚した後、外国へ行つた。今はアメリカの大学にいるらしい。年末にクリスマスカードが来たり、時々母にメールが来たりするようだが、実際のところトーマの中に父の記憶はほとんどない。それは琴音と一緒にだ。

トーマの母、咲子は優秀な看護師で、いつも凜としていて冷静で堂々としている。ぶれも揺るぎも感じさせない。「私達が迷つたら、患者さんも迷うのよ」と、後輩に指導しているらしい。それはトーマに対しても同じだつた。職業柄か、どんな緊迫した状況でも、落ち着いて状況を観察し、把握する。

今頃どうしているだろうか。病棟を走り回つているのだろうか。もう自分が誘拐された事を知つているのだろうか。

「……ごめんね、トーマくん。お母さん、心配してると、きっとトーマの気持ちに答えるように、琴音が顔を埋めたまま謝る。きっと母は心配しているだろう。母一人子一人だ。立派すぎるく

らい立派な母だが、一人息子を思う気持ちは誰にも負けない。それはトーマに充分届いていた。死ぬほど心配しているだろう。そんな事を思うと涙が出そうになる。

ふとトーマは琴音を見た。

琴音の前で自分は泣いたらダメだ。絶対にダメなんだ。トーマは自分に強く言い聞かせた。僕には、僕の事を大切に思ってくれる家族がいる。死ぬほど心配してくれる母がいる。兄弟のように育ったタケルという親友がいる。でも、琴音には誰も心配してくれる人はいないのだ。僕が泣いたら、琴音ちゃんは絶対に自分自身を許せなくなるに違いない。

「……大丈夫だよ」

なんの根拠もない言葉だとはわかつている。

「大丈夫だよ、きっと」

しかし、トーマは繰り返した。何か言わずにはいられなかつた。それは琴音に対する言葉でもあり、自分を励ます言葉でもあった。「知ってる？ 想像出来ることはなんでも現実になる可能性があるんだつて。だから、大丈夫つて思えば、きっと大丈夫なんだよ」

これは母親の受け売りだ。「病は気からつて言うでしょ。重病だと思えば、大したことない病気でも重病になっちゃうし、大丈夫なんだつて思えば大変な病気でもよくなる事もあるんだから」と。そう、だから、駄目だと思つたら駄目になるし、大丈夫だと思つたらきっと大丈夫になる。強くそう信じる事が肝心なんだ。僕が迷つたら、きっと琴音ちゃんも迷う。

トーマはきつぱりと言つた。

「大丈夫に決まってるんだから……」

› 続く

その頃、タケルは村の外れにある民宿「龍野屋」にいた。築百年以上といつ触れ込みのこの民宿は年寄りの夫婦が細々と営んでいる。ようで商売繁盛には程遠く、広い宿の中はひんやりとしていて静まり返っていた。タケル達以外に客はいないようだ。

「これでも祭りの時には案外客も来るんだけどねえ」

部屋へ案内してくれるおばあさんはしわくちゃの顔をさらりとくちやくちやにして愛想笑いを浮かべた。

「冬の終わり頃に祭りがありましてね。火を使う古い祭りで、観光客がたくさん来るんですよ。村の人間よりもくくらい。その時は娘夫婦が帰つて来て、宿を手伝つてくれるんですわ」

よほど普段話し相手がないのか、おばあさんは一人でひつりなしに喋りながら廊下を歩く。その後ろをタケルと竜介が黙つてついて歩いていく。

おばあさんは「竹」と札のかかつた部屋の前で足を止めた。

「こちらです。お風呂はもうござりへしたら沸きますから。じゃ、
ごゆっくり

竜介は黙つて会釈する。タケルは小さく「どうっす」と札を言つた。

おばあさんが立ち去つてから一人は顔を見合わせた。サングラスの下の竜介の目が困惑している。なんで俺がこんなガキと一人きりなんだ……という言葉がさつきからタケルの頭にちらりと響いてくる。

「……ガキガキって言つなよ、おっさん」

タケルは横目で竜介を見る。竜介はよほど子供が苦手らしい。しゃくに障るのでガキと言われる間は絶対におっさんで通してやろうと決めた。

「入つていいんだろ?」

タケルは木の戸をがらがらと開けた。

中は十畳くらいの和室になつてゐる。部屋の真ん中にはいかにも重たそうなぢやぶ台があり、その上には何枚かのリーフレットや骨董品のポット、湯のみや急須の入つた木の箱が置かれてあつた。

部屋の奥はささやかながら縁側風になつていて、障子がはめ込んである。小さなテーブルと低いソファーが二つ置いてあり、風呂上がりにでものんびりとくつろぎながら外を眺められるといったところだ。サッカーの合宿でこないう旅館には何度も泊まった事がある。

タケルは障子を開けた。障子の向こうはガラスの大きな一枚戸だ。少し歪んだガラス越しに、外の景色がよく見える。

日はすっかり傾き、金色の光が山の陰影を際立たせていた。静かな木々のざわめきと、川のせせらぎが聞こえる。ヤミの声はいつの間にかカエルの声に変わつていた。

タケルはガラス戸を開けて網戸にするとソファーに座つた。

よく考えたら荷物を全部グランドに置いてしまつた。携帯も財布も、何も手元にない。車の中で携帯を借りて家に電話しようと思つたが、二人とも貸してくれなかつた。それどころか一平に、

「すまないがしばらくは連絡出来ないよ。第一、圈外だ」

といなされてしまつた。

試合はすっぽかす、行方不明にはなる、今頃コーチは真つ青だろう。家には連絡が行つたのだろうか。アユは何をしているだろうか。いつもならもうじき一緒に風呂に入る時間だ。父ちゃん、ちゃんと入れてくれるかな……。そんな事が頭の中に浮かんでは消える。

「今頃大騒ぎになつてるんだろうなあ……」

タケルが呟くと、竜介はぢやぶ台の横に座り込み、長い脚を持て余し気味にしながら胡坐をかいた。

「後先考えずに付いて来るからだ。知らない人には付いていつたら駄目だと学校では教わらなかつたのか」

「何言つてんだよ、車に乗れつて言つたのはそつちじやないか」

タケルは口をどがらせた。

「俺じゃない。一平だ。まつたく、ああ言えば」「いや、可愛くないガキだ」

竜介はむつとした表情のままちやぶ台に肘をつき、頬杖をついた。
「一平が今動いてる。大騒ぎになられちやこつちも困るんだ。まあ、事が全て終わって、お前が家に帰つたら、親父さんに一発殴られるくらいの騒ぎにはなつているだろうがな」

「親父で一発……という事は、母ちゃんには五十発くらいかタケルはとほほ……と頭を抱えた。

「俺の方が迷惑だ」

竜介はサングラスを取るとちやぶ台の上に置く。

「ただでさえガキは苦手だとこいつの、琴音ならまだしも、こんな生意気なガキ。それもよりにもよつて、テレパスのガキときている。始末が悪いにも程がある」

「本人の前でぼろくそに言つな！」

「お前、すぐに『読む』だろ？」「口に出すだけマシだと思え」

竜介の冷たい言葉にタケルは鼻の頭に皺をよせて応酬した。

「俺と一平だけなら宿なんていらないんだ。どうせ張り込みで寝られないんだから。お前がいるから仕方なくここに来た。経費で落ちなかつたら、お前の親に請求書回してやるからそう思え」

「なんだよ、それ」

いい歳をして、大人げないにも程がある。タケルはなにか言いがえしてやろうと思ったが、竜介が自分の携帯を取り出し操作し始めたので仕方なく黙り込んだ。

居心地の悪い沈黙が続く。いたたまれなくなつて、タケルが立ち上がるうとした時、入り口の戸が開いて一平が入つて來た。ごめんごめんとにかくこしながら片手を上げた。

「課長に連絡が取れた。君とトーマくんの『ご家族にも連絡がついたよ』だ。警察と相談して、なんとかつじつま合わせをするつてさ。心配しないで。なんとかなるから」

中腰で固まつているタケルに指でOKとしてみせた。

「琴音が無理やり連れ去られたからね、誘拐という事実が出来た。

「これでようやく警察が手を入れられるって課長は『満悦だよ。これでようやく東京の火龍教本部の捜査が進むってさ』

「渡りに船つてやつか。相変わらず性格の悪い女だな……。課長のせいでダークウォーカーなんて仇名をつけられるんだ。『うちの課は』竜介の口調は皮肉たっぷりだ。

「まあまあ、そう言わないで。あ、僕達の上司は女性でね。いい人なんだよ、根は」

一平は困ったような笑顔でタケルを見た。

「なんのことだか、さっぱりわからないよー。」

タケルはむき~つと鼻息を荒くしながら身を乗り出した。

「ダークなんとかってなんだよ、一体！ おっさん達、警察官なんか？ だつたら早く一人を助けてよ。おかしいじやん、あれ、どうみても誘拐じやないかあ！」

「ばんつ！ と両手で座卓を叩く。

一平はタケルの肩を押さえて、無理やり座らせた。

「落ち着いて落ち着いて。ちゃんと説明するから。

僕達は警察じやないんだ。警察にはかなり近い組織なんだけど……。公安調査庁つて言つてね。色々調べたりはするんだけど、残念ながら逮捕権がない。僕達が調べた事を警察に提供する

「おいしいところは警察に持つていかれるつてこいつた。……おい、

いいのか？ こんなのにべらべらしゃべつて

「こんなのってなんだよ、こんなのって」

タケルは身を乗り出して竜介を睨んだ。

「まあまあ

そして湯呑を並べるとお茶を入れ始める。

「ここまで絡んでしまった以上、何も教えないっていうのもね。それに、この子はテレパスだよ。隠したところで読まれるし、中途半端に知られて変に誤解されても困る」

一平の言葉に竜介は肩をすくめた。

「さつき琴音がパイロキネシスで、琴音の力を悪用したがっている連中がいるって話はしたよね」

「……うん」

「その連中は火龍教という宗教団体で、東京に拠点がある。これがまた、ちょっとあぶない集団でね。さつきもちらつと言つたと思うけど、呪いの炎の噂、その噂を流しているのもその団体だ。去年の秋くらいから、都内で若者の焼身自殺が三件続いたんだ。どれも事件が自殺かよくわからないケースで、表向きは自殺なんだけど、死にたくなるような動機がない。身辺調査をすると関係者に火龍教の信者がいる。友人だつたり、元カノだつたり。でも彼らには完璧なアリバイがある。完璧すぎるくらい完璧な、ね。とにかく、どこかしら不自然な点が多い。証拠がないから警察も手を出しかねていた。そんなこんなしてるうちに、呪いの炎で焼き殺されたんだなんていふ噂が流れ始めて……。だいたい若い子っていうのは、そういう都市伝説が好きだからね。みるみるうちに信者が増えてきた。困ったものだよ」

一平は熱いお茶の入った湯呑をタケルの前に置いた。

「その怪しそうな宗教団体の代表になつてている男が、琴音とトーマくんをさらつたんだ。この男、根岸って言うんだけど、この村の住人でね。琴音とも古くから付き合いがあるらしい。根岸の狙いは琴音を教団の女神さまとして担ぎ出すこと。本物の超能力者が絡んでるというので、僕らの出番という訳だ。万が一、超能力で犯罪を起これれちゃ警察もかなわないからね」

「……なんで？」

「だつて、証拠が残らないから」

「あ、そうなのか……と、タケルは納得した。そんな事、考えた事もなかつた。

「俺達がダークウォーカーなんて呼ばれる所以、ゆえんくだ。本物の超能力なんてのは堂々と人様の前で披露出来るようなものじやない……」

竜介が冷ややかに言い放つた。その瞳は氷のように冷たい光を帶びている。一平は眉をひそめて首を振った。

「子供の前で言つことじやないよ、竜介。

とにかく、琴音が強力なパイロキネシスである事がわかつたから、あえてサイキックである僕が彼女を預かつていた。まさか、一人で家を抜け出したりするなんて思いもよらなかつたよ。だつて、彼女は本当に内氣で、大人しい女の子だから。物わかりも良いし、自分の立場はよく理解していたし……」

そんな事を言われても……とタケルは鼻の頭をかく。そんな事情があるなんて、思いもよらなかつた。

「別に君達を責めてるんじやないよ。僕達に油断があつたんだ。よくよく考えれば、彼女はまだ十一歳、小学生だもの」

優しい笑顔でタケルを見る。

「君達と出会えたのが、よほど嬉しかつたんだううな

「……」

タケルは湯呑を握る。

「あちい

一瞬手を離したが、またそおつと握りなおした。

「で、俺、どうしたらしい?」

恐る恐る一平に聞いてみる。一平はゆっくりとお茶を呑む。

「僕はこれから東京へ戻らなきゃならない。本部の調査が残つてゐる。竜介は予定通り、こちらで情報収集を」

一平ののんびりした言葉に竜介が顔をしかめる。

「こいつはどうするんだ

一平はまじまじとタケルを見る。タケルもじいっと一平を見返した。ふいに拍子抜けするような笑みを浮かべた。

「君はここで待機していくください。一人でつまらないかもしけないけど、しばらくの間です。そつとくは待たせないつもりだから」「俺にも何か手伝わせてよ」

タケルはまっすぐに一平を見た。トーマを助けなければならぬ

のだ。こんなところでのんびりしてられない。

横から竜介が口を挟む。

「ガキの遊びじゃないんだ」

「わかつてるとー！ でもトーマを助けたいんだ」

吠えるタケルを一平がまあまあとなだめた。

「大丈夫。あの二人を傷つけるような事は、しばらくはないと思う。琴音は連中にとつては大事な存在だし、トーマくんに何かあつたら琴音が暴走して取り返しのつかない事になるつて連中もわかつているだろうし」

そう言うとタケルの肩をポンと叩いた。

「申し訳ないが、今は君に出来る事はない。危険も伴う。君のすべきことはここで待機すること。一人で出歩かない。いいね？」

穏やかだが有無を言わせぬ強さがある。タケルはしぶしぶ頷いた。

一平と竜介はしばらくして出て行つた。

› 続く

閑散とした民宿にただ一人取り残されたタケルは、することもなく畳の上にあおむけに寝転がり天井を眺めるしかなかつた。

暇を持て余してごろごろと畳の上を転がつていたが、ふとちやぶ台の上に置いてあるリーフレットを手にした。

「火王村観光案内……観るトコあるのか？」

手作り感満載のリーフレットを開くと、村の中の地図に観光ポイントが描かれてある。

村営のアスレチックや、道の駅があるらしい。季節によつてはアコやアマゴを釣る事も出来るよつた。そう言えれば祭りの頃には客が多いとさつきのおばあさんも言つていた。

地図を辿つていた指がふと止まる。そこには「火王神社」と書いてあつた。

「火王神社……千年以上の歴史を誇る神社で、村の名前の由来になつてゐる火龍を祀つてゐる。火王村のシンボル的なスポット……。これつて」

タケルは慌てて起き上がると座りなおした。いつもなら絶対にスルーしてしまつよう細かい文字を一生懸命辿る。

『火龍伝説』～火王村伝承より

昔むかし、海を渡つて一匹の恐ろしい龍がやつて來た。

そして村の近くにある山の中腹の窟いわやに住みついた。

龍は口から火を吐き、野を焼き、山を焼き、村を焼き、村人はたいそう難儀した。

何度か都から誉れ高い武将がやつてきたが、龍の炎の前になすべもなく焼き尽くされた。

困り果てた村人は龍を鎮めるために人身御供を立てることにした。人身御供には村で一番美しい娘が選ばれた。

娘は花嫁衣装を身にまとい、窟へ送り込まれた。

不思議な事に、それ以来、龍はふつりと姿を見せなくなつた。村人は窟の前に祠を建て、龍と、龍を鎮めた娘を祀つた。それから数年後、祠の前に赤ん坊が捨てられていた。

不思議な事にこの赤ん坊は火を操る事が出来た。故に村人たちはこの赤ん坊を「龍の子供」として恐れ敬い、たいそう大切にした……。

「龍の子供……火を操る……」

タケルの脳裏に琴音の顔が浮かぶ。バイロキネシス、発火能力保持者。さつき確かに一平はそう言つた。

「火王村のシンボル……火王神社……火龍教……」

ぐるぐると言葉が頭の中を駆け巡る。

「……龍の子供？ 琴音は、龍の子供？ まさか、そんな話……あり得ないよな？ でも」

タケルは茫然とリーフレットを握りしめた。

翌朝タケルの目が覚めたのはまだ明るくなりきらないうちだつた。目に入つて来たのは黒く変色した古い天井。ここ、どこだ？ そうだ、ここは火王村だ。

タケルは昨日の出来事を頭の中で再生しながら、もそもそと身体を起こした。部屋の中は自分が寝つ転がつている布団だけで、竜介が帰ってきた気配もない。

「マジでほつたらかしか……」

タケルは頭をかきむしつた。冗談じゃない。このまま何もしないでこんなところでごろごろしていいなんて耐えられない。

タケルは寝る前に枕元に脱ぎ散らかしたはずの自分の服を探し、手早く着替えた。椅子の上に置いていたレガース（脛当て）を手にとつてしまはく考えていたが、それも身につけた。ユニフォームを着ると気が引き締まる。これはタケルにとつて戦闘服なのだ。

タケルは地図の載つたリーフレットを手に玄関に向かった。

廊下はまだ真っ暗といつても良いくらいの静けさが満ちている。そこを猫のように足音を忍ばせて歩いていく。玄関で自分のシューズを履き、そつと引き戸を開けた。思ったよりも大きな音に一瞬首をすくめるが、人の気配はないようだつた。

外に出ると、胸一杯に空気を吸い込んだ。山の匂いが満ち溢れ、しつとりと湿り氣を帯びた朝の空気が心地よい。山の自然から元気をもらえそうだ。

タケルは朝もやが立ち込める中へと駆け出した。

地図を見ながら川沿いの道を足早に歩く。とにかく火王神社とやらにたどり着きたい。そこが琴音に縁のある場所である事は間違いない。火龍教だと仲間割れとか、そんな事はどうでも良かつた。トーマの無事を確かめなければ居ても立つてもいられない。

地図上では目と鼻の先のようだが、かなり大雑把な略図だつたようである。三十分経つてもそれらしい目印には辿りつかない。もしかしたら見逃して行き過ぎたのか。

「この地図、めっちゃウソつき」

タケルはリーフレットを指でぱちんと弾いた。

遠くで微かに爆音が響いている。

ふと前を見ると、道路から少し下にある田んぼに続く斜面を草刈り機で草刈りをする人が見えた。草刈り機の作動音が広がる田んぼの上に響いていたのだった。

タケルはその人に近づくとおそるおそる声をかけた。

「あのお、火王神社つてどこですか」

麦わら帽子をかぶつて草刈り機を操つていた男は顔を上げた。

「はあ？」

作動音がやかましくて、タケルの声が聞こえていなかつたようだ。タケルの姿を見て草刈り機を止める。そしてタケルの頭の先から足の先までじろじろと見る。見慣れない子だな……どこの子だ？ 男の“声”がタケルに伝わつてくる。

「おはようございます。あのぉ、火王神社ってどこですか？」

タケルは大声で聞いた。

「火王神社かあ？ あそこに橋があるだろお、あの橋渡つたらすぐ
に鳥居があるから。その上だあ」

「ありがとうございました！」

タケルは頭を下げるとき走りに先を急いだ。麦わら帽子の男は手
を止めたままじっとタケルの後ろ姿を見送っていたが、またすぐに
草刈り機の音が響き始めた。

橋にはすぐにたどり着いた。古い木造の橋だ。欄干から身を乗り
出して下を見ると、透明で冷たそうな水の中に小さな魚がすばやく
泳ぎまわっているのが見える。川はところどころ深い翡翠ヒスイく色で白い水の流れが生き物のようにうねり流れ去る。

流れに足をつけてみたい衝動にかられたが、今は押さえて橋を渡
つた。

橋を渡り切るとアスファルトが途切れ地道になる。そしてその
先に大きな石造りの鳥居があった。

「あつた……」

タケルは鳥居を見上げると田を閉じた。

大きな深呼吸をする。

頭の中のアンテナをうんと広げてみる。

トーマの気配はまだ感じられない。が、タケルを包みこむように
静かなさざ波が打ち寄せられてくる。穏やかで静かなその波はどこ
か懐かしい。時々こんな空気の場所がある。そのさざ波の源はなん
なのかタケルは知らないが、そういうところでは不思議に心が落ち
着く。

タケルは目を開けた。薄い朝もやと深い緑の木々の中にまっすぐ
続く参道がある。

「……よし、行くぞ」

タケルは駆けだした。

> 続 < <

トーマと琴音は土蔵の中で一晩を明かした。長い夜だった。ぼつりぼつりとお互いの事を話していたが、そのうち一人とも眠り込んでしまったようだ。

根岸が土蔵の扉を開けて入って来た時、トーマは床の上に丸くなつて、琴音は棚にもたれながら眠っていた。

琴音が先に目を覚まし、根岸を見上げる。

「おはよう。よく寝られたかな?」

「……そんなはずないでしょ」

琴音はきつい視線を投げつける。

「いい加減にここから出して。閉じ込めるなら私だけでいいでしょ? お願いだから、トーマくんは帰してあげて」

「言つただろ? 全ては君次第。ところで君のボディーガードはよほどの寝ぼすけらしいな」

根岸はそういうと、だんつと足を踏みならした。その音と振動でトーマが目を覚ます。

「……あ、おはようござります」

寝ぼけているトーマは目をこすりながら丁寧に朝の挨拶なんかをしてしまった。根岸が苦笑いする。

「マイペースなことで……。出なさい、二人とも。朝食だ」

根岸に促され、二人は土蔵を出た。土蔵の外には昨日の若い男が控えている。琴音への警戒は相変わらずだ。

母屋に入り土間を上ると広い台所だった。そこには中年の女性が三人ほどいて、忙しそうに働いていた。

「琴音さま」

一人の女が琴音に気付き、声を上げた。

「おかえりなさいませ」

他の一人も手を止めて恭しく頭を下げる。

「……やめてください」

琴音は顔をしかめた。

「朝ごはんのご用意をしてありますから」

最初に頭を下げる女が一人を促した。琴音は台所の奥の食卓を見た。幻のように母と兄の姿が見えたように思った。

「どうしたの？ 大丈夫？」

トーマが琴音を覗きこむ。琴音は悲しそうに首を横に振った。

「なんでもない。座つて」

二人は並んで食卓についた。

「うわあ……。旅館みたい。日本の朝ごはんつて感じ……」

トーマは目を丸くする。ご飯に味噌汁、焼いた鮭に卵焼き、お浸し、お漬物。毎朝パンかシリアルで簡単にすませてしまうトーマにとつては驚異的なメニューだ。トーマのお腹がにぎやかに騒ぎ出す。まるでタケルみたいだ。でもよくよく考えれば昨夜は夕食を食べていない。お腹がすくのも当たり前だった。

一心不乱に食べるトーマと対照的に琴音はあまり食欲がないようだつた。

「これから忙しくなる。しつかり食べておきなさい」

根岸が柱にもたれ腕を組みながら琴音に声をかける。

「何があるの」

琴音は固い表情で根岸を見上げる。根岸はにやりと笑うだけだ。トーマは黙つて食べながらも周囲を観察していた。

台所には女性が三人。台所にはもう一つ大きなテーブルが置いてあつて、その上には大きな鍋がいくつも並んでいる。

かなり大きな炊飯器が二つ、両方から白い蒸氣が上がっている。四人五人の食事の量ではない。少なくとも二十人分くらいはありそうだ。

時々玄関の扉が開け閉めされる音が聞こえ、何人かの男が大声で話す声なども聞こえてくる。人の出入りが激しい。

「ここで集会かなにか、あるんですか？」

トーマはもぐもぐと口を動かしながら聞いてみた。根岸は小さく肩をすくめた。

「集会……まあ、そんなもんだ。もうすぐ笙くんも帰つてくれる。鈴子さんの葬儀以来かな、君がお兄さんと会つのは」

「お兄様が？」

「私が呼んだ。笙くんがここに帰つてくれるのも最後だ」

「どういうこと？ お兄様にへんなことしないで」

琴音はぱんつと音を立てて箸を置くと、勢いよく立ちあがつた。きんつと耳の奥が痛くなるような衝撃が一瞬台所に広がつた気がした。

三人の女達が思わずこちらを見て、凍りついたように動きを止める。その顔には怯えの色が浮かんでいた。

「こんなところでやめたまえ。危ないだり」

根岸は落ち着いた声で琴音をなだめた。

「それとも、ボーアフレンドの前で君の特技を披露してみるか？」

琴音は無言で根岸を睨みつけた。そしてそのまま勢いよく台所を出て行く。

琴音の足音が廊下を遠ざかっていく。張り詰めた恐怖と緊張が一気に解け、女達はへなへなと座り込んだ。

「根岸さん、やめてくださいよ……。琴音さまをわざと怒らすような事、言わないでください。命がいくつあっても足りやしない」「結構だね。そのくらいの恐怖の心を抱かせてこそ、値打ちがあるというものだ。もう彼女は逃げないだろう。人質もいふことだし」

根岸とトーマの目が合つた。

「君は人身御供だ。龍を鎮めるためのね」

「人身御供……ですか、僕が」

トーマはじつと根岸を見た。この男は一体何を考えているのだろうか。自分にタケルのような力がない事がつくづく残念だ。しばらくして一人の男が勢いよく駆けこんできた。

「笙さんが駅に着いたそうです」

「こよいよだな」

根岸は土間の方へと向かう。途中で思い出したように振り返ってトーマを見た。

「琴音は自分の部屋にいるはずだ。あいにく、そこしか空いてなくてね。君もそこにいればいい。もう土蔵には閉じ込めないよ。だが、言つておくが、この屋敷からはもう逃げられない。監視の目があちらこちらにある事をお忘れなく。それに君が逃げ出したら、琴音の身が危なくなる。琴音だけじゃない。暴走する琴音のせいで死人が出るかもしれない。……寝ざめが悪いだらうな、そんなことになつたら」「

根岸は意地の悪い笑いを残して台所から消えた。女人人が氣の毒そこにトーマを見ている。

「……性格悪いですよね、あのおじさん」

思わずグチると、三人の女達は大きく頷いた。

食事が終わるとトーマは台所を出た。土蔵で見張りをしていた男が待ち構えていたようにトーマを見る。

「こ」の先の、一番奥の部屋だ

無愛想に指さす。トーマはその指先を見た。

長い廊下がまっすぐに続いている。この廊下の突き当たりに琴音の部屋があるらしい。トーマが歩き始めると、少し離れて男がついてくる。

廊下に沿つて障子がずつと並んでいて、その向こうで人がせわしく動き回る気配がしている。障子の向こう側を気にしながら進んでいくと、わずかに隙間があつた。そこをそつと覗くと、中は大広間になっている。五、六人の男女が座布団を並べたり、長机を出したたりしていた。

「そこじゃない」

鋭い声が背後からトーマを制する。トーマは後ろからついてくる男をちらつと見ると、へへっと愛想笑いをしてみせた。男は無言でトーマをじっと見てくる。仕方なくトーマはまた歩き出した。

廊下は途中で直角に曲がっていて、そこから再びまっすぐ伸びている。長い廊下だった。この家の敷地の広さがうかがい知れる。

廊下の一番端の部屋だけは襖ではなく洋風のドアがついていた。扉の上部には見るからに急いでしらえの錠がつけられている。トーマはそのドアの前で立ち止まる。後ろからついてきた男が扉に付けられた鍵を外し、トーマを無言で促した。トーマはそつとノックをした。

「……琴音ちゃん。いる？ 入つていい？」

しばらくの沈黙の後、どうぞと言う小さな声が聞こえた。

トーマはそつとドアを開けた。中を覗く。埃っぽいような、カビ臭いような空氣だ。この部屋だけが子供部屋らしくフローリングになつていて、ベッドや学習机が置いてあった。プラスチックの小さな引き出しや埃をかぶつた旧式のパソコンが部屋の隅に押し込められるように置かれている。主人不在をいいことに、物置代わりにされていたのだろう。

琴音はベッドに腰かけていた。トーマは一瞬ためらつたが、思いきつて中に入った。後ろ手に扉を閉めると、すかさず外から錠をかけられる気配がした。

「……大丈夫？」

「うん」

琴音は小さく頷く。トーマは琴音の正面に正坐した。

「なんかたくさん人が来るみたいだね。大広間にたくさん座布団が並んでた」

「うん」

「なにが始まるんだ？」

琴音は小さく首を横に振る。

「「めんね。私もわからない。でも、お兄様が来るって事は、よっぽどの事だと思う。お兄様は今、神主の修行で大学にいるし、もうお母様もいないから、帰つてくる理由はないもの」寂しげにうつむく横顔にトーマの胸が痛む。

とんでもなく寂しいに違いない。わかるような気はする。保育園くらいの頃は母の帰りが遅くなる時などふとたまらなく寂しい気分になったものだ。だが、自分にはタケルとその家族がいた。母が急な仕事でどうしても帰れない時は、母から連絡をもらつた佳奈が迎えに来てくれるのだ。それでもどうしようもなく寂しくて、タケルの部屋で布団をかぶつてしまく泣いた事もある。そんな時は必ずタケルが構ってくれる。トーマの心をタケルはいつも気にかけてくれていた。タケルのおかげでどれだけ自分は救われているだろう。しかし、琴音にはそんな友達もいなかつたのだ。こんなに優しくて、可愛いのに、不思議だつた。

「聞いてもいいかな……」

「うつむいていた琴音は少し顔を上げてトーマを見た。

「僕、よくわからないんだけど、監どうして琴音ちゃんの事をあん

なに怖がってるの？ 僕が琴音ちゃんの人質つていう意味がよくわからぬ。……龍の印つて？ 前、琴音ちゃんが持つてた根付けの事？」

琴音は小さく首を振る。そしてじっとトーマの目を見た。

「……トーマくんには迷惑かけるもんね。でも、でも、きっと知つたら私の事、嫌いになる。皆みたいに、私の事、怖がつて……」

琴音の瞳に涙がたまつていぐ。唇が小さく震えている。

トーマはどぎまぎした。慌ててズボンのポケットを探り、ハンカチを出すと琴音に差し出した。

「……あんまり綺麗なハンカチじゃないけど

「ありがと」

琴音はハンカチを握りしめると、ぎゅっと手を開じた。それでもまだぽろぽろと涙がこぼれて落ちる。

こんなにこりこり思ひをさせていると想つと、トーマも切なくなつてきた。

「ごめん、悪い事聞いたやつた。気にしないで。誰にでも言いたくない事つてあるから」

「ううん。いいの。トーマくんには知る権利があるよね」

琴音はトーマのハンカチで涙を拭いた。そして、ゆっくりと右手をトーマの前に差し出す。

「……見てて」

琴音は手のひらを上に向けると、軽く握った。しばらくしてその手をゆっくりと開く。手のひらの中に小さな空間が出来る。

「なに？」

手のひらの中でふいに空気が揺らめく。そしてぽわっと小さな白い光が生まれた。ゆらゆらと陽炎のよつよつゆらめく光は小さな炎に見える。トーマは息を呑んだ。

「手を近づけてみて」

琴音に促され、トーマは恐る恐る自分の手を近づける。

「……温かい？」

琴音の手のひらの光から熱が伝わってくる。まるで小さなランプに手をかざしているようだ。琴音は小さく頷き、きゅっと強く光を握り締めた。光は琴音の手の中に吸い込まれるよつよつ消えた。

「手品……な訳ないよ、ね」

琴音は右手を膝にこすりつけた。

「今はこの程度しか出来ないけど、時々暴走して、その辺の物を燃やしてしまつの。これが龍の印」

トーマはまじまじと琴音を見つめた。火を吐く龍を祀る神社。その神主の娘。龍の印。トーマの頭の中でジグソーパズルのピースが一つ一つはまつていく。

「赤ちゃんの頃、時々癪癪起こして大泣きすると、きまつてその辺の物が焦げたんだって。最初はお兄様のいたずらだって思われてて、お兄様は随分怒られてたらしいの。濡れ衣なのにな。可哀そうなお兄様」

琴音は肩をすくめた。

「三歳くらいの時お兄様と大げんかして……子供部屋を燃やしてしまつたらしくて……。覚えてないんだけど」

琴音はうつむいた。

「それから私を見る周りの目が変わった……。龍の印を持つ子供だつて。お兄様も私のこと、嫌いになつた。だつて、燃やされそうになつたんだもん、しょうがないよね」

膝の上で握りしめた拳の上に涙がこぼれていく。トーマはそつと琴音の拳を自分の手で包み込んだ。

「……怖くない、の？」

「怖くなんかないよ。全然」

そしてにつこり笑つて見せた。

「世の中には色んな力を持つ人間がいるんだよ。……ヘンな話だけど、僕、結構そういうの慣れてるかも」

「どういうこと？」

「うーん、まあ、なんて言つたらいいのか……」

まさかタケルがテレパスだとは言いにくい。タケルも自分の能力を人に知られるのは嫌がっている。いくら親友だつて本人の承諾なしにバラすのはいけないことだ。トーマはうーんと唸りながら言葉を探す。

「上手く言えないけど……例えば、虫とか動物つてさ、すごい能力があるんだよ。言葉を持たないのに、情報を伝え合つ手段を持つてたり、地震を予知するとか、人間の病気を察知したり治す力があつたりとか。僕、思うんだけど、人間だつてきっと本来はすごい能力を持つてたんだつて。まだ人間じゃなくて動物だつた頃は、そんな能力を皆がきっと持つてたんだ。でも、進化していく途中で薄くなつてきて、でも、時々、その名残みたいにすごい力を持つている人がいたりするんだと思うんだ。そういうのを超能力とか言うけど、本当はちつとも特別な力じやなくて、当たり前の力なんじやないかつて」

トーマは琴音の目を見た。

「だから琴音ちゃんの力だつて、きっとへんな力なんかじやない。僕、怖いなんてちつとも思わない。どっちかつて言うと、ちよつと

「うらやましいくらい」

そう、時々タケルが「うらやましいと思うのだ。人間の心ってどうなってるんだろう。動物の心もわかるんだろうか。僕にあんな力があつたら、もっともっと知りたいことがたくさんあるの。」「やっぱりトーマくん、ちょっと変わってる」

琴音は小さく笑った。

「うらやましいなんて、初めて言われた。そんな風に思う人もいるんだね……」

瞳は涙で濡れているが、明るい笑顔だった。

「なんだか、ほっとしちゃった……。でも、トーマくん、それって私が進化しない動物ってこと?」

「え? あ~, もしかしたら、そうかも」

「ひどおい……」

琴音は唇を尖らせる。視線が合つ。しばらへして puff とトーマが

吹き出し、二人はくすくすと笑いだした。

笑いながらトーマは心の中で呟いた。

大丈夫だよ、琴音ちゃん。僕は絶対に君の傍にいる。何があつても

……。

› 続く

その頃タケルは「うと……。

全力疾走で長い階段を駆け上がり、息を切らしながら本殿の前へとたどり着いた。

「うわ……、すっげえ」

うつそうと生い茂る縁に埋もれるように静かにたたずむ火王神社は、今まで訪れた事のある神社や寺の中で一番古くて厳かな感じがした。

本殿の方からは静ながらも力強いパワーがにじみ出でてくるのを感じる。

「……あれか？」

むき出しの岩肌にぽつかり空いた洞窟を見上げる。あれが龍を閉じ込めた窟というヤツだろう。

「なんか、まじでヤバそう……」

思わずぶるっと身震いする。

本殿の中に目を移すと、大きな黒い木彫りの龍が見えた。しんと静まり返った闇の中で、じつとタケルを窺がっているようだ。思わずごくりと唾を呑む。

タケルは本殿の前に立つとぱんぱんと拍手を打つた。
すみません。友達を探しに来ただけです。罰を当てたりしないでください。

一応、心の中でお願いをしておく。ここには間違いく何かがいる。それが何かはわからないが。

気を取り直して、辺りを見回した。大きな古い土蔵、狛犬、手水屋、社務所、どこも静かにたたずんでいるように見える。

目を閉じて、大きな深呼吸をし、頭の中のアンテナを外に向かって伸ばしていく。ラジオのチューニングを合わせるように、静まりかえった空氣の中には人の気配が強くなったり弱くなったりしながら

タケルの頭の中に響いてくる。

かなりの数の人の気配だ。どうやら社務所の方らしい。タケルはさらに意識を集中した。その中にトーマの意識がないかどうかを必死で探す。

「んんんんんん……はああ

しばらくしてタケルはへなへなとしゃがみこんだ。

「わからん！」

集中しすぎて頭ががんがんする。自分の力を意識してこんな使い方をするなんて初めての事だ。五分が限界だった。

「ちくしょう、俺の力も案外役に立たねーな」

タケルは両手でこめかみを押さえながら立ちあがった。社務所と本殿の間へと目をやると、生垣が目に入った。竹を編んだ柵とそれほど背の高くない木々が社務所の敷地と境内を仕切つているようだ。

「結局は、身体を張れってことか」

タケルはもう一度大きな深呼吸をした。

「……よっしゃ、行くぞ」

タケルは生垣に向かつて走り出そうとした。

途端に、ぐいっと首根っこをひつつかまれて、ずるずると後ろへと引きずられる。

「わああああ？」

いきなり身体が宙を浮き、本殿の前まで吹っ飛ぶ。ひどく尻もちをつき、ぎやあっと悲鳴を上げながら尻を押された途端、今度は身体が地面から浮き上がり、弧を描きながら、本殿の中へと勢いよく放り込まれた。板の間の上をごろごろと転がる。

何が起こったのかさっぱりわからなかつた。とにかくしたたかに尻を打つて七転八倒である。

「し、尻が割れる……」

「アホか、お前」

頭上から声が降つてくる。竜介が柱の陰に立っていた。端整な顔

に怒りをあらわにしながら、ゆっくりと歩みより、尻の痛みにのたうちまわっているタケルの胸元をぐいっとつかんだ。どすの効いた声で唸る。

「宿に居ろと言つただろうが」

「ちょ、ちょっと待つた。尻、尻が痛いんだつてば……割れる……」

「尻は元々割れてるだろうが！　いや、そうじやなくて、なんでこんなところをちょろちょろしてる！」

「そんな事言われたつて、お願ひ、ちょっと待つて……」

タケルの懇願に竜介はしぶしぶ手を離した。タケルはあうあと唸りながら、しばらく床の上で芋虫状態だった。その情けない様子をあきれてみていた竜介から次第に怒りの波長が小さくなるのが伝わってきた。

竜介はがつくりと肩を落とす。

「どうもお前とこると調子が狂う……。悪かつたな、加減しなくて」

タケルはようやく身体を起こすと床の上に胡坐をかいた。

「で、なんでここに来たんだ」

「決まつてるじやん。トーマの居場所を突き止めるんだよ」「探偵、じつにじやあるまいし、ガキがおもしろ半分に首つっこんでんじやねえ」

竜介は冷たく言い放つ。タケルは唇を尖らせた。

「おっさんこそ、何してるんだよ。情報収集だつて言つてだろ。こ

んなところにいたつてなんも情報ないじやん。木彫りの龍と懇談会してんのか？」

「いいか、お前が宿の布団の中でよだれ垂らして眠りこけている間に、俺は村中で情報収集をしてたんだ。だいたいなあ！」

竜介は身を乗り出してタケルにかみつきそうになつたが、はつと我に返つたようだつた。なんでこんなガキ相手にムキになつてるんだ、俺は……。竜介の困惑がプールサイドの波みたいにタケルに伝わつて來た。

すかしてゐる割には結構かわいいところがあるのかも知れない。こ

のおっさん。タケルはにまつと笑つて見せた。竜介の困惑がますます大きくなる。

「なあ、おっさん」

タケルは座りなおして正坐になった。

「ガキガキつて言つけどな、俺、テレバスなんだぜ？ ここからでもあの建物の中に入る人間の気配がある程度わかる。時々トーマとゲームしてるんだ。トーマが俺に意識を飛ばして、それを俺が読むつていう。トーマの意識なら、俺、多分すぐ見分けられる」

竜介は黙つて聞いている。

「俺なら身体が小さいから、その辺の隙間からでも中に入れるし、隠れるところもいっぱいある。中に忍び込んで様子調べられる。役に立つぜ？ お買い得だと思つんだけどな」

「……」

「なあ、おっさん。一平つて人の代わりに、俺とコンビ組んでくれよ。今だけでいいから」

竜介はサングラス越しにじつとタケルを見つめていたが、ふいに口を開いた。

「本気か？」

「うん」

しばらく考え込んでいたが、竜介は小さな溜息をついた。しうがねえなあ……という声が響いてくる。

竜介はポケットから小さなイヤホンのようなものを取りだした。小さなマイクのようなものがついている。

「これを耳にかける」

タケルはおずおずと受け取ると、右の耳にかけた。イヤホンと違うのはコードがついていないことだ。

「無線みたいなものだ。声も勿論伝えられるが、お前の意識は俺のコアで受けることが出来る」

竜介は自分のサングラスを指した。タケルは目を丸くしながらにじり寄り、身を乗り出して竜介のサングラスを覗きこむ。

「すっげ～。これ、サングラスじゃないの？」

「サングラスとしても使ってるが、受信機だ。お前が放つ思考が変換されて俺のところに届くようになっている。言つてみればテレパ

ス仕様の無線機だな」

「すっげ～、すっげ～！ どうなつてつてんの？」

「説明したところで、お前にわかる訳ないだろうが。時間の無駄。

……おい、なんでもいいが、離してくれ」

竜介は迷惑そうにタケルを押しのけた。他人に接近されるのは慣れていないようだ。

「うちの開発部門の力作で、普段は一平が使っている。東京に戻るのに置いて行きやがった」

もしかしたら、こういう事態を予想していたのかもしれない。竜介は苦笑いを浮かべた。あいつは優しそうな顔をしていて、案外人が悪い。だいたいテレパスというのは何を考えているのかよくわからぬ。この犬ころみたいな少年も含めて、だ。

「すっげ～！ アニメみたいじゃん！ うつは～、こりや～、ヤバいっすよ」

その犬ころは目を輝かせている。まるで新しいボールを見せられた柴犬だ。

「アニメとか言うな」

竜介は渋い表情になる。だからガキは嫌なんだ。

「まあ、そう言つなつて」

タケルは嬉々としてイヤホンを耳に押し込んだ。気分はすっかり特撮ヒーローだ。そんなタケルの頭を竜介はガシッと驚掴みにした。無理やり自分の方に顔を向けさせる。

「そここの生垣の向こうは庭園になつていてるはずだ。身を隠す場所には事欠かない。いいな、絶対に建物の中には入るなよ。わかってるな。琴音とトーマはともかく、お前は捕まつたら殺される可能性もある。その時は責任取らんぞ。……いいか、俺達みたいなダークウォーカーに人権はないと思っておけ」

竜介は厳しい口調でそう言いながら、まっすぐにタケルを見た。

「ダークウォーカー？」

確かに昨日もそんな言葉を聞いた。

「ダークウォーカー、闇を歩く者。俺達サイキックの事だ。公安調査庁の組織内ではそう呼ばれている。俺達はこの力故に闇に生きているようなものだ。……生き延びるために自分の力を使おうと思つなら、お前も覚悟しておくんだな」

タケルはきょとんとした顔で竜介を見つめた。竜介が薄く苦笑いを浮かべる。

「そのうち嫌という程、思い知らされる時が来る……」

暗い重い感情の波がざわざわと広がる。が、すぐにその波は消えた。竜介は一瞬にして気持ちを切り替えたようだ。そしてタケルの腕をひっぱり、本殿の裏手へと連れて行く。

「俺はこの辺りにいる。指示はその都度俺が出す。痛い目に会いたくなければ、指示に従え。いいな」

「うん」

タケルは大きく頷いた。身体の奥に静かな高ぶりが生まれてくる。この緊張感は試合の前の感覚によく似ていた。

どこかでキックオフのホイッスルがなつたような気がした。

「行け」

竜介の声を合図に、タケルは外へと飛び出していった。

> 続く <

火龍教 < ; > ; (前書き)

囚われの身となつたトーマと琴音を救うためにタケルは火王神社内へと潜入した……。

鳥居の下に一台のタクシーが到着したのは昼前の事だった。中から出てきたのは一人のスーツ姿の青年だ。色白でほつそりした顔立ちはどこなく琴音と似ている。切れ長の目もとは静かだがどことなく人を拒絶するような鋭さをたたえていた。

ゆっくりと参道を進み、長い石段を登つていく。

息を切らす事もなく石段を登り切ると、本殿に向かつて一礼した。

「ただいま帰りました」

そしておもむろに社務所の方へと歩みを進める。

この青年が琴音の兄、笙しょうである。

笙は玄関の扉をゆっくりと開けた。中に入ろうとして、動きが止まる。

母が亡くなり、自分が修行のために家を空けている間、ここにいるのは根岸と古くから住みこんでいるまかないの家政婦の一人だけのはずだ。家の中は時が止まつたように静まり返り、空氣の流れさえ滞る、そんな状態のはずなのに……だ。

空氣が暖かい。台所から煮炊きする匂いが流れてくる。足元を見ると、靴がずらりと並んでいた。かなりの人数だ。ぞつと見ただけでも「十人は下らない。

「おかえりなさい、笙さん」

奥から根岸が出てきた。

「ずいぶんとたくさん人が集まつてますけど」

笙は目をわずかに細めた。根岸に対する不信感がにじみ出ている。

「今日は相続の事務処理つて話じゃなかつたんですか?」

「そうですよ。相続の話です」

根岸の頬に薄い笑いが浮かぶ。

「まあ、上がって下さい」

根岸が促した。笙は眉をひそめる。気に入らない。自分の家に帰

つて来て、何故他人に上がつて下さいなどと言わなければならぬのかと、笙は心の中で呟く。

廊下を歩き、大広間の襖を開けた。思わず立ちつくす。

「……なんです、一体」

大広間には大勢の人がいた。長机が並べられ、そこでそれぞれが昼食を取つたり喋つたりしている。異様なのは全員が黒装束に身を包んでいる事だった。酒が入っているのか、声高にしゃべる男達が多い。

笙の存在に気付いた一人が大声で笙の名を呼んだ。
それを合図のようにその場の全員が一斉に笙の方を見た。
いきなり水を打つたように静まり返る。

笙は言葉を失つた。

目の前に並んでいる顔がじつと笙を見ている。古くからの氏子もいたが、ほとんどが見た事のない顔ぶれだ。それも若い。神社に入りする古い氏子であればおおかたが高齢のはずだが、ここに集まっているのは若い者が多かつた。その視線は一様に冷ややかで、中には明らかな敵意を浮かべているものもあつた。

笙は寒氣を覚えた。

「彼が真山笙。琴音さまの兄上だ」

根岸が冷ややかな笑いを浮かべながら笙を紹介する。

「……どういう事です。なんですか、この人達は！」

笙はきっと根岸を睨みつけると、語氣荒く迫つた。

ざわざわと畳のするる音が響き、笙の近くにいた数人の男達が一斉に飛びかかつた。

「なにをする！」

必死であらがつたが、相手が多すぎる。あつという間に腕をねじあげられ、畳の上にねじ伏せられた。頬が歪むほど強い力で頭を畳に押さえつけられ、笙は呻いた。

「根岸……」

笙は歯を食いしばりながら唸る。その様子を見て、根岸は声を上

げて笑いだした。

「手荒な真似はしたくなかったんですけどね。でも、どう考へてもあなたがうんとは言わないだろうと思つて」

根岸は笑うのをやめると、笙の目の前にしゃがみこんだ。

「火龍教は変わるんです。こんな山奥の、古ぼけた、朽ち果てた民間信仰ではなく、もっともっと現代の人間が切望する、強い魔力を持つた宗教にね」

そして笙の細い顎をぐいっと掴んだ。

「火龍教に必要なのは、伝統とか、富司とか、そんなカビの生えた古い文化じゃない。人の心をひきつける、強力な力だ。そう、怒りの炎、復讐の炎、全てを焼き尽くす炎。その炎を操る、龍の力そのもの」

「琴音……か？」

呻くように笙が呟く。瞳に激しい怒りが燃えている。

「もしあなたに火龍の力があれば、今頃あなたが新生火龍教の教祖となつているでしょ。残念ですよ。今後あなたは火龍教から手を引く。神職につくのはあなたの勝手だが、よその神様に仕えるんですね。ここには必要ない人だ」

「勝手な事を！　ここは僕の家だ。真山家のものだ」

「あなたは大きな勘違いをしているようですね」

根岸は再び声を上げて笑つた。

「先代も、鈴子さんも、そういう事にはトンと疎かつたからねえ。ここはね、既に真山家のものではないのですよ。火龍教の所有物なんです。言つてみれば、真山家は居候。^{いそつるう}だから、あなたはなんの権利も主張することは出来ない」

「根岸！」

笙の身体が怒りで震えている。

「いやあ、準備にずいぶん長い事かかりました」

根岸は満足そうに笑いながら、笙を見下ろす。

「かかりましたよ。十年」

根岸は感慨深そうな表情を浮かべた。

「今日はその仕上げの日です。記念すべき大イベントがあるんです。新生火龍教としての記念すべき最初の儀式がね。あなたにはそれに同席してもらつて、世代交代をしかとその目で確かめてもらいましょうか。それまではゆっくりつよいしていくくださいよ。久しぶりの実家ですからねえ」

そしてくじつと顎でしゃぐ。連れて行けという事だらう。笙は無理やり立ちあがらされる。抗つて暴れると、誰かが笙の腹に膝を叩きこんだ。笙は呻きながら身体を折り曲げる。そして、引きずりれるようにして部屋から運び出された。

笛の根岸を罵る声が遠ざかっていく。
足そうに広間の面々に向かって叫んだ。

「ああ、忙しくなるぞ。儀式の準備を進めましょうか。」
おおつという賛同の声が湧きあがる。そして広場の喧騒はますます大きくなつていつた。

続<<

大広間の騒ぎは奥の琴音の部屋にも微かに聞こえてきた。

「なんか、ずいぶん騒がしい……ね？」

トーマと琴音は顔を見合わせる。一人は耳をすませた。庭の方から人の叫ぶ声が聞こえてくる。その声を聞いて、琴音の顔色が変わつた。

「まさか」

慌てて庭に面した窓を開けて身を乗り出す。トーマも琴音の横から外を窺がう。

「お兄様？！」

庭の土蔵に無理やり押し込められようとする笙の姿が見えた。

「お兄様！」

琴音が叫ぶ。一瞬、笙が一いちょうを見た。視線が絡みつく。笙の視線は怒りに燃えている。

「なんてことを！」

琴音が踵を返して、扉に飛びついた。ノブを掴んで力任せに引っ張るが開くはずもない。

「こんな扉！」

琴音が両手を扉に押し当てながら、手に意識を集中させているのがわかった。耳鳴りにも似た、キーンと空気が震えるような金属音がトーマの耳の奥に響きだす。

琴音は扉を燃やそうとしている！

トーマは直感した。昨日から何度か感じているこの金属的な感覚がきつと琴音の能力の予兆に違いない。

トーマは慌てて琴音の腕を引っ張つた。

「駄目だよ、燃やしちゃ駄目だ！」

「離して！」

「落ち着いて！」

トーマは必死で琴音を抱きしめるようにして引き留めた。

「今、琴音ちゃんがあそこに飛び出して行つても、騒ぎが大きくなるだけだよ！ あんなに人がいるんだから、僕達が行つたところでお兄さんを救えない！」

「じゃあどうしたらいいのー！」

琴音はきつとトーマを睨みつけた。強い瞳にじきつとする。こんな瞳を、遠い昔に見た事があるような気がした。

「とにかく落ち着いて」

トーマはきつぱりとした声で琴音に言つた。自分でもびっくりするくらい、腹の底から声が出た。自分が琴音に引きずられていキー一騒ぎたてたら、琴音はますます興奮するに違いない。相手を鎮めるにはまず自分が落ち着かなきゃ……。トーマは自分に言い聞かせた。

「今は人が多すぎる。仮にこの扉を燃やしたとしても、すぐに見つかってしまうし、僕達が煙に巻かれてしまうよ。もつ少し待とう。なんだかバタバタしてるから、きっとそのうちチャンスが来る。丈夫だよ。お兄さんを閉じ込めたって事は、今すぐどうこうしようつて事じゃないんだから。時間はきつとあるよ」

ゆつくりと一言ずつ言い含めるように、トーマは琴音に話しかけた。次第に琴音の表情から険しさが薄れていいく。

琴音は、力なくベッドの上に腰を下ろした。それを見て、トーマも学習机の前の回転椅子に腰をかけて、腕を組んだ。

「根岸さんがお兄さんを呼び出したのは間違いないよね。さつき言つてたもの」

ゆらゆらとゆつくり左右に椅子を回転させる。

とにかく手元にあるカードを整理しなくちゃ。いや、もっと情報がいる。まずは敵をよく知る事から始めなきや。

ふいに部屋の隅にあるパソコンが目に入った。

「ねえ、琴音ちゃん。これって、使えるのかな

「多分……」

「ちょっと見せても、うつてもいいかな」

琴音は頷いた。

トーマはパソコンの傍に近づくと、しゃがみこみ、配線を確かめる。綿ぼこりが積もっているが、ビリやケーブルはつながっているようだ。

「この家の中に他にもパソコンはある?」

「……うん多分。社務所に事務用のがあるはずだけど」

「じゃあ、生きてるかな」

「詳しいんだ……」

「細かいことはわからないけど、うちのパソコンをインストールした時、電気屋さんの傍でずっと見てたんだ。ああいうのって、なんとなく雰囲気で頭に入る」

「……トーマくん、すごい……」

トーマの記憶力は虫や動物の知識だけに発揮される訳ではないらしい。

「丸暗記とか、見た物を短時間で覚えるとかって、得意なんだよね、実は」

トーマはぱらぱらと配線をチョックしながらくべもつた声で答える。

「さて、どうかな」

トーマは立ちあがつてモニターの電源を入れ、今度はハードディスクの電源を入れた。ピッという音がして埃をかぶつたモニターにぼやけた光が灯る。

「あ、来た来た」

トーマは嬉しそうにそつそつと、回転椅子をパソコンの前に引つ張つて来た。

「……立ちあがつた。でも、遅いな~」

ぶつぶつ言いながらキーボードを叩く。家のパソコンは母親も使うが、トーマの方がその扱いは詳しい。やっぱり男はこういうの強いわ……とよく母親が感心するのだ。母に頼られていのと思つと、

嬉しくなるものである。

「わあ、これ98だ……。学校のより古いや。そりやあ重いはずだよ」

トーマの独り言に琴音は目が点である。

トーマはお構いなしにインターネットで検索をかけた。

キーワードは？

火龍、龍の子供、火龍教……。

パソコンの画面には色々な文字が浮かんでは消える。トーマの眼鏡にパソコンの光が反射して、トーマをひどく大人っぽく見せていた。

琴音はあっけにとられてその様子を眺めるしかない。

しばらくして、トーマは手を止めた。

「……あつた。これだ、きっと」

パソコンの画面にはあるホームページが映っている。黒い背景に燃えさかる炎が蛇のようにうねりながらうごめいている。墨字を模した書体の赤い文字が躍っていた。

「火龍教……」

「こんなの、知らない」

琴音は息を呑む。見たこともないようなホームページだったが、そこに映っている龍の紋様は琴音の根付けと同じだった。

見てはいけない。でも、怖いもの見たさで、つい見たくなる。そんな危険な空気が画面からにじみ出でてくるようだ。

カーソルを入り口に合わせてクリックするとメインメニューの画面に出た。教義、掲示板、告知、問い合わせなどの項目が並んでいる。それを一つずつ開けてチェックしていく。

トーマの右手がめまぐるしく動き、眼鏡の下の視線がせわしく左右に走る。

「告知……降龍祭……日付は……今日？」

トーマは呟きながら左手の爪を噛み始めた。

火龍の印を持つ琴音。

この神社の正式な後継者である笙。

琴音に近づき取り込もうとする根岸。

火龍教……火王神社……龍の印……降龍祭……。

「……カルト宗教って知ってる?」

しばらくして、トーマはポツリと呟いた。

「カルト?」

「そう。新しく出来た宗教で、なんか怪しい事してる宗教。僕達が生まれる前にずいぶんと大騒ぎされた宗教があつたの知ってる?」

「……ううん」

「僕も詳しくは知らないけどさ、たくさん酷い事をしたらしい。人を傷つけたり、毒をばらまいたり」

琴音は顔色を変えた。

「そんな……火龍教は、火王神社はそんなんじゃないよ! 大昔からここにある神社で」

「うん。わかつて。あの木彫りの龍を見た時思つた。きつとここの人はこの龍を大切に護つてきたんだろ? て。このホームページはこここの神社のホームページじゃない。ほら」

トーマは問い合わせ先の電話番号を指さす。

「市外局番が東京だもの。東京にこここの事務局なんてある?」

「……聞いたことない」

トーマは再びゆつくりと回転椅子を回し始めた。

「火龍教は一つある……ってことだよね。一つはここ。もう一つはこのホームページの事務局。ここの中はお兄さん。そして東京のこの事務局の中心は、恐らく根岸さん。……どう考へても穏やかに話し合いをしようつて空気じゃない」

「……うん」

「今日、ここで集会がある。だから大勢人が集まつて。でもお兄さんがその中心になる事はない。お兄さんが帰つてくるなり閉じ込められたつて事は、ここの人達は根岸さんの仲間つてことだよね」

そうだ。カードは揃つた。そのカードが意味するもの。それを考

えなきや……。

トーマはふいに天井を見上げた。

「クーデター……」

「……クーデター？」

「そう。お兄さんが王様で、根岸さんは反乱軍。そして君は反乱軍のシンボルってことかな？」

「シンボル？」

「そう、火龍教の教祖、女神。言つてみれば、火を吐く龍、そのもの」

「そんな、私は違う！」

「ごめん。琴音ちゃんはそんなんじゃないって事、わかってる。でも、根岸さんにしてみたら……、琴音ちゃんの気持ちなんて関係ないんだ。琴音ちゃんがそこに居てさえいればいい。お兄さんから琴音ちゃんへ、火龍教のシンボルが交代する。琴音ちゃんという存在が必要なんだ」

「そんな……」

「そして、その集会が、降龍祭。ホームページに書いてあるでしょ？ 今日の夜、ここで行われる……んだと思つ」

「訳わかんない！」

「俺も訳わかんない！」

琴音の泣き声に重なるように別の声が聞こえてきた。えつ？ と二人が顔を見合せると、開けっ放しの窓からタケルがひょいと顔を覗かせた。

「タケル！」

「やつと見つけたぜー！」

嬉しそうににいっと笑い、ひょいと窓をよじ登り、中に入つて来た。

› 続く

「タケル！」

「トーマ！」

二人はがしつと抱き合つた。

「良かったあ！ やっぱり僕の声、聞こえてたんだね！」

「当たり前だろお！ あんなすげ〜勢いで『殺される』なんて叫ばれてみろよ。俺の頭、かち割れるかと思ったよ」

「でもどうしてここに？」

「これには、まあ、色々と深い訳があつて。今説明してる間はないよ」

タケルはぽりぽりと頭を搔く。頭にはクモの巣やら枯れ葉がひつついていて、体中砂ぼこりにまみれている。

耳元のイヤホンから竜介の怒鳴り声が飛び込んでくる。

「お前！ 中に入るなと言つただろうが！」

タケルは顔をしかめながらイヤホンを押さえた。

「わかつてるよ。すぐ出るつて！ トーマと琴音を見つけた。一番

奥の部屋だつた。二人とも無事

「当たり前だ。儀式が済むまでは傷つけないのはわかつてる！ それより、そんなとこで長居をするな！ まだ仕事は残つてゐるだろうが！」

「へいへい

タケルは肩をすくめると窓の外を窺がつた。誰もいないのを確かめるとまたひょいと外に出る。中を覗きながら右手の親指を立てて見せた。

「もうちょっと待つてゐ。助けてやる。絶対に！ また後でな！」

そしてすばやく縁の下へと潜り込んでいった。まるで忍者だった。二人はあっけにとられてしまった。

ノックがされたのはタケルが部屋を出てすぐだつた。

一瞬一人は顔を見合わせる。

「……どうぞ」

琴音が固い声で答えると扉が少し開いた。

「あの、琴音さま。飲み物をお持ちしました」
扉の隙間から恐る恐る一人の中年女が顔を覗かせた。先ほど台所
に居たうちの一人である。琴音と目が合つと、慌てて目を伏せる。
女は盆の上にジュークの入ったガラスのコップを一つ乗せていた。
部屋の中に入ると、学習机の上にそつと置く。

「ねえ、お兄様は？」

「ごめんなさい。何も答えるなど根岸さんから」

女は上ずつた声でそれだけ答えると逃げるように部屋から立ち去
つた。

「……皆、あんな感じ。私の事、疫病神だつて思つてゐる」

琴音は自分を嘲るように小さく笑つた。トーマの視線を感じて慌
てて両手を振る。

「大丈夫よ、平氣。だつて慣れっこだもの」

そんな事に慣れっこになつてしまふなんて……。トーマは腹立た
しく思つた。

交わす言葉がふいに途絶え、沈黙が訪れる。

「……ジューク、飲もつか」

琴音がグラスを一つ手に取ると、トーマに渡してくれた。そして
自分もグラスを持つ。

「オレンジジュークか。炭酸が良かつたなあ」

重い空氣を変えたくて、琴音はわざと明るく言つ。

「僕は炭酸苦手なんだよね。あの、ゲップつてする時のさ、鼻の痛
いのが……」

トーマも少しオーバーに鼻をつまんで見せた。

二人はせかされるようにジューク談義に花を咲かせた。この異様
な屋敷の中で、少しでも普通でいるためには、そんな些細な他愛の
ない話を必死で続けるのが一番のような気がした。

ジュークを飲みながら話していたが、じみじくしてトーマは頭がふわふわと揺れるような感覚を覚えた。

何かおかしい。貧血だらうか。いや……妙に、眠いような気が…

…する。

琴音がゆっくつとした瞬きを繰り返している。瞼が今にも閉じてしまいそうだ。

「やられた……ジュークだ、きつと」

トーマは必死で目をこすりながら意識を保とうとするが、眠気がどんどん強くなつていぐ。眠つてはいけない。眠つてしまつたら、逃げるチャンスを失つてしまつ。

琴音がゆっくつとベッドの上に倒れこむ。

「琴音ちやん……ダメだよ」

トーマは琴音を振り起そうとしたが、身体に力が入らない。ベッドの下にしゃがみこみ、ベッドに頭を預けた。

「……もつ、ダメ」

トーマの意識はことごと眠りの底へと落ちて行った。

扉がゆっくつと開く。そこには根岸が薄笑いを浮かべながら立っていた。

> 続く

トーマと琴音の身になにが起こっているのか、タケルは知る由もなく、縁の下から出るタイミングを見計らっていた。相当長時間縁の下に潜んでいるのだ。そろそろ外に出たかった。

ここは相當に居心地の悪い場所だ。途中でかいクモや足の長いへんな虫にたかられて、危うく悲鳴をあげそうになつたりしたが、それはなんとか我慢出来た。我慢できないのは床板の隙間からしみだしてくる、どろどろしたエネルギーだった。

大勢の大人がいる。それもなにかしら屈折した、歪んだエネルギーを心の中に抱え込んでいる大人ばかりだ。どろどろした負の思考。妬み、怨み、怒り、絶望、復讐……、そんな名前をつけられた闇のエネルギー。干上がったドブ池のヘドロ臭いぬかるみに足を突っ込んでしまった時のような感覚だった。不愉快なのに絡めとられる。なんとか足をひっこ抜こうとするのに、まるで泥の奥へと引き込むとするような吸引力がある。得体の知れない力が自分を取りこもうとしている。

むかむかしてきた。ここに長くいっては危ない。アラームがタケルの頭の奥で鳴り始める。

タケルはここから出る事を竜介に告げた。

「……仕方ない。庭で隠れてろ」

竜介の声が耳に届く。

タケルは様子をつかがいながらダッシュで縁の下を飛び出した。そのままの勢いで、庭木が密集している植え込みに飛び込み、そのまま土蔵の裏へと移動した。誰にも気づかれてはいないうようだ。ようやく一息つけるというものだ。

「俺つてば忍者みたい……」

ちょっと面白い。

「調子に乗るな、このアホ！」

竜介が間髪いれず突っ込んできた。まったく子供心を解かないおっさんである。

しばらくしてから、タケルは氣を取り直し、母屋の方に意識を集中した。

建物の中はますますざわめきを増し、忙しそうだ。人の出入りも激しくなっているし、中の人々の興奮度もどんどん上がっている。まるで脈拍のようにドクンドクンと興奮が伝わってくる。

「境内にも人が増えてきている。俺も一度移動するから、お前はもう少しそこで隠れてる」

竜介の声が聞こえてくる。

それはいいけど、いつまでここにいなきゃいけないんだ？ とタケルは口に出さずに竜介に問いかけた。

「儀式が始まれば人間も外に出る。その時にどやくせにまぎれて出てこれるだろ？ とにかく俺が良いといつまでそこで待機だ。いいな」

タケルは顔をしかめた。さっきから蚊に食われまくっている。かゆくて仕方ない。

「どれだけ蚊に食われたって出血多量にはならん。お前みたいな血の気の多いガキは、たくさん吸われて丁度いいくらいだろ？ よ」

まったく竜介は意地が悪い。タケルはとほほと頭を抱えた。

「あ～、腹減ったな」。よく考えたら朝も昼も食つてないじゃん

ぶつぶつと小声で文句をたれる。

今までは氣が張っていたから空腹も感じなかつたが、やることもなくここで膝を抱えているとそんなくだらないことを思い出す。

腹減った腹減ったとひたすら考えていたら、イヤホンから竜介のあきれた声が飛んで出てくる。

「お前、どういう神経だ。よくこういう状況で腹が減るもんだな」

「しかたねえだろ。育ち盛りなんだから」

「寝てる。寝てたら腹も減らん。省エネモードだ」

「ちえつ、何が省エネモードだよ。俺はハイブリッドカーか」

「そんな高級車とも思えないがな」

大きなお世話だった。

あほなやり取りだつたが、竜介もそれなりにタケルを気遣つてゐるのだろう。

タケルは土蔵の壁にもたれると目を閉じた。

建物から聞こえてくる人の気配の波をうち消すように、ざわざわと山の木々がざわめく。

セミの声がどぎれどぎれに耳に届く。

時々霧のような冷氣を帯びた薄い気配が風に乗つて周りに満ち溢れる。

なんの気配だらう。今まで似たような波長を感じた事はない。それは人間のそれではないような気がした。得体の知れない、しかし、不思議に怖いというような感じもない。むしろ神聖な、清々しい、湖の水面みなもを渡る風のような……。

タケルはその霧に意識を集中した。気持がふうっと吸い込まれるように心の奥底に沈み込んでいく。

深い湖の底へ……。

強い風が吹きつけている。その風には鼻を突くような刺激臭が含まれていて、目を開けるのがためらわれた。嫌な匂いだつた。

ようやく開けた目の前には、灰色の重苦しい雲で覆われた空と緑色の波打つ峰々が広がっていた。

ひと際強い風が吹き、もうもうたる煙がタケルを取り巻いた。思わず顔をそむける。その刺激臭は明らかに何かが燃えている匂いだつた。

眼下には小さく集落が見えた。そのところから、黒い煙が立ち上り、谷間を渡る強い風がその煙を巻き上げ、こちらに向かって渦を巻くように空を駆け上つてくる。炎が噴きあがり、火の粉が一気に舞い上がる。

炎の龍だ……。龍が空を駆け上つてくる。

タケルはつねりながら空を駆けまわる煙と炎の渦を見つめた。それは、のたうちまわる龍の姿だった。

燃えぬきり……。皆、燃えぬきてしまえばいい……。

誰かの叫びが頭に響く。

炎を操るこの吾が、それほど恐ろしか。それほど憎いか。それほど憎はぬましこか。吾は生きることすら許されぬのか。

それは怒りと悲しみに満ち溢れた、血を吐くような声だった。

吾は呪われし者。誰にも受け入れられぬ、呪われし者。

炎はいつしか集落を焼き飛ばし、周囲の木々へと燃え移る。炎と煙が恐ろしい勢いで増殖していく。

誰も吾を受け入れてくれぬ。それどころか、吾を慈しんだ者すら疎んじられる。

燃えたぎるマグマのような感情の激流がタケルの周りを取り囲み、タケルは思わず胸を押さえて身体を丸めた。余りの熱さに胸が苦しい。その熱さは木々を舐める炎のものではない。怒りと悲しみに満ち溢れた激情の炎だ。

一三歩後ずさる。と、そこが岩場に開いた洞窟であるという事に初めて気がついた。山間を駆け抜け抜けてきた風がこの岩肌に当たり、長い時間をかけて抉つた風穴だ。

熱い風と煙が風穴の中に容赦なく流れ込む。

良いのです。これで……良いのです。

かぼそい呴きが切れ切れに聞こえてくる。

どれだけ皆がそなたを疎んじようと、わたしの、そなたを慕う心に嘘はない。そなたの痛みはわたしの痛み。そなたが己を呪い、己を焼き尽くすならば、この身もそなたと共に炎となるつや。そなたの炎に焼き尽くされるならば本望……。

胸が痛くなるような優しさと慈しみに満ちたその声は次第に細くなつていぐ。最後の力を振り絞つて、命のともしびを燃やそうとしている。そんな思いがタケルの胸に迫つて来る。

もしも来世があるのならば、わたしは必ずそなたと再びまみえましょう。……たとえ、今生で共に生きる事が叶わぬとしても……。

ダメだ。このままではこの人は死んでしまう。この人を死なせてはいけない！ 焦りながら辺りに目を凝らす。声は竈の奥から聞こえてくる。タケルはもうもうと立ち込める煙を必死で突き進む。この奥で死にかけている声の主を救わなければ！

煙の向こうにうつすらと人影が見える。

人影は一つだった。

倒れている女とそれを胸に抱きしめる男。

おおおおおお……

岩肌がきしむような咆哮が響き渡る。身の置き所のないほどの愛おしさと悲しみが、堤を突き破った鉄砲水のような勢いでほとばしる。

なにゆえに。

なにゆえに。
なにゆえに。

タケルは激流に押し流されて、窟から空中へと放りだされた。耳元で風が唸る。身体に絡みつくような煙と感情の流れにもみくちゃにされながら、落ちて行く。

どうした！ 返事しろ！

誰かが耳元で叫ぶ。

はつと田が覚めた。

鼻先に木の枝と、縁の葉っぱが揺れている。あれ、こゝ、どこだ？ と、辺りを見回した。

白い土蔵の壁、木の匂い、ざわつく気配。

「あ……あ、そうだ」

トーマと琴音を見つけて、縁の下から出て、土蔵の裏で隠れてたんだ。

「どうした、大丈夫か」

耳元で押し殺した竜介の声が聞こえる。

「……大丈夫だけど、俺、寝てた？」

タケルは「じじ」と田をこする。今のは夢だったのか？ いや、寝ていたという実感はない。でも、夢にしてはあまりにも生々しい。煙の臭いがまだ鼻についている。タケルは自分の腕や服を匂つてみた。汗と砂ぼこりの臭いは微かにするが、煙の臭いはまったくついていない。くんくんと周囲の空気を匂つてみたが、そこからも煙の気配はない。

「やつぱり夢……だったのか」

タケルは首をかしげた。

「一時間近く黙り込んでた。思考すら飛んで来なかつた。何があつ

たのかと思つたぞ」

竜介の声からわずかに緊張がほのける。

「そんなに長い時間？ ひやー」

自分でもびっくりだった。

「夢を見てた……ような気がするんだけど。なんか、不思議な……。
そうだ、洞窟の中にいたんだ。人がいて……」

「無事ならそれでいい」

竜介が遮る。

「その話は合流してからゆっくり聞く。それより、もうそろそろ心構えしておけ。動きがありそうだ」

タケルは唇を尖らせたが、腰を上げ、小さく身をかがめ木の陰から建物の方を窺がう。人の気配が少しずつ移動していくのがわかる。建物の外、境内の方へと向かっているようだった。

よし、いよいよだ。トーマ、琴音、待つてろよ。タケルはちらりと舌舐めめずりした。

› 続く

神社の境内では儀式の準備が着々と進められていた。黒装束の人々が忙しそうに立ち働いている。本殿には龍の刺繡しそうが施されたきらびやかな天幕が張られ、本殿から続く参道に沿つて、何本ものかがり火まつが立てられている。本殿の前には一抱えもあるような大きな松たいが用意されていた。

石畳の参道にはロープが張つてあって、その外側に桟敷さじきが設けられている。どうやら人がそこに座るようになつてているようだ。パツと見ただけでも相当な数の人数が集まる事が予想出来る。

あちらこちらで釘を打つ音や、指示をする声が飛び交つていた。

喧騒けんそうは境内だけではなかつた。神社の外の鳥居の前にもマイクロバスや、タクシー、ワゴン車が次々と停まつては人々を下ろしていく。時々聞こえてくる言葉から、地の者ではない事がすぐ分かつた。ほとんどが東京からの若者だらう。黒いひらひらのドレスをまとつた、この村には恐らく一人としていないうだらうというような派手な髪形や化粧の若い娘がいる。原色に染めた長髪をなびかせて、鼻や唇にピアスをきらめかせている青年がいる。かと思うと、さえない格好の、地味な若者もいる。とにかくまちまちだつたが、全員に共通しているのは揃つて熱にでも浮かされているような目をしているということだつた。

鳥居の下には受付が出来ていた。そこで参加費を払い、龍の家紋のついたお守りを渡される。琴音の持つていた根付けと同じ紋である。

行列は参道をゆつくりと上がつていく。そして境内にたどり着くと、順々に桟敷席の前方へと進んでいく。玉砂利を踏む音と、低い声で話す人の声がざわざわと緑の境内に満ちて行く。いつもの清々しい空気はいつの間にかコンサート会場のような異様な熱気と喧騒に入れ替わつていた。

どんどん増殖していく人の群れに紛れるように竜介の姿があった。これだけ大勢の人の中では竜介に注意を払う者はいない。竜介は人混みの中を滑るように移動していく。

社務所の前まで移動すると、サングラス越しに周囲を注意深く窺がう。

「いいぞ。出てきても」

低い声で呟く。しばらくすると社務所の奥の垣根の隙間からタケルが這い出てきた。すぐに竜介の姿を見つけて駆け寄ってくる。

「うつひやー。すげえ人」

境内に溢れる人の群れにタケルは目を丸くした。

「こんなにいるとは思わなかつた。百人くらいは軽くいるんじゃない?」

集会の場が屋外であることが救いだ。これだけの人数が狭い建物に密集するとタケルは頭ががんがんしてきて、倒れそうになる。

竜介がラップでくるんだ大きなおにぎりを一つタケルに手渡した。

「うわ、気がきくー！」

喋るな、思考をとばせ、という竜介の叱咤が飛ぶ。タケルは小さく肩をすくめた。

さつき宿のばあさんに作つてもらつた。あれだけ耳元で『腹減つた』の連呼をされちゃ、こつちがたまらん。

なんやかんやと言いながら、案外親切な竜介である。タケルはがつがつとおにぎりをほおばりながら、境内にぞくぞくと集まる人をじろじろ見た。

これ、もしかして火龍教の人?

タケルは上目づかいに竜介を見上げながら思考を飛ばした。竜介が頷く。

東京の、な。ネットでかき集めた信者だ。……現実逃避しか考えていない連中だ

竜介の思考に容赦はない。

現実逃避つて？

かくんつと竜介の力が抜けるのがわかつた。

お前、もう少し国語の勉強しろ
ちえつ。教えてくれてもいいじゃんよ。けち。
現実から逃げてるつてことだ。自分の力でどうしようもないことを、オカルト的な力が解決してくれるんじゃないかつてな、つまらん事を真剣に信じている連中だ。
厳しいな、おっさん。

タケルは目の前の集団を見た。平均年齢は二十歳前後といふところだろうか。学生もいるだろうし、社会人もいるだろう。果てることなく打ち寄せる波のように、ぐわんぐわんと色んな思考がタケルの周りにまとわりつく。それはなんとも肌触りの悪い思考だった。粘り気を含んだ濁った水のように不快な響きを含んでいる。この人達は琴音を祀り上げて、何を願つつもりなのだろう。

呪いだ。

竜介が冷たい視線を目の前の集団に投げかける。

ホームページのうたい文句は『火による浄化』。『穢けがくれた者を聖なる炎で焼き清める』。『しが、それは要するに、気に食

わなければ焼き殺せということだ。琴音の能力を使ってな。
「ありえないよ！」

思わず言葉が口から出る。竜介に頭を軽くはたかれた。

声に出すなと誓つたろうが！

タケルは頭をさすりながら竜介を睨みつけた。

ありえないよ。琴音がそんな事するはずないじゃん。あいつにそんな恐ろしい事が出来るはずない。

琴音がどれだけ純粋で素直な女の子か、タケルはよく知っている。

あいつが暴走した時の力をお前は知らん。……ま、俺もまだじかに見た事はないがな。

琴音は小さい時に自分が起こした火でこの家の一部を焼いたそうだ。琴音の父親はその時に死んだ。それがどういうことか、いくらお前がアホでもわかるだろう。

タケルは息を飲んだ。

琴音が……焼き殺したと？

それはわからない。だが、琴音の力と父親の死が深く関わっていることは確かだ。一平が言うには、琴音の力のほとんどはその時に封印されてしまっているらしい。人間は耐えがたい経験をすると、その記憶を自分の心の奥底に封じめることがある。琴音もまた自分の一部と記憶を封じ込めた。その封印を解いたらどうなるか……。

一瞬、背中を寒気が走った。想像できない。が、とんでもなく恐

るじこ事が起じるよつた氣がする。いや、起じるに違いない。

まさかとは思つけど、呪いの炎つてのは……。

琴音の力なのかと聞きかけて、慌ててその思いを打ち消す。

いや、今までの事件は恐らく火龍教の中で交換殺人みたいな事をやつてたんだろう。しかしあつらが琴音を手にしたとなつたら……最悪だ。連中はやりたい放題の焼き放題。証拠がないから野放し状態。取り返しがつかない。そんな事にならないために俺達が動いているつて事を忘れるな。いいな。

タケルは真剣な表情で頷いた。琴音の力を悪用されてたまるものか。同じサイキックとして許せない。琴音のためにも、トーマのためにも、自分のためにも絶対阻止しなければならない。

もうすぐ一平が合流する。それまでは俺達も動けない。いいが、勝手な事をするな。最悪の事態を避けるためにはぎりぎりまで我慢することも必要だ。言つておくが、今度勝手な真似をしたら、その時は容赦せんからな。

竜介はじろりと横目でタケルを見た。タケルは首筋に強い圧迫感を感じた。竜介の『力』がタケルの首を絞めている。竜介から伝わってくる波長は殺氣で満ちている。『冗談やこけ威し《おどし》でない事は確かだつた。

わ、わかつたよ。

タケルはしぶしぶ頷いた。

> 続 < <

母屋の一室ではまだ薬で朦朧としている琴音が女達の手によつて着替えさせられていた。

白い着物の上に緋色の薄縄の衣を着せられ、両脇から支えられながら椅子に腰かけさせられている。後ろに立つた女は琴音の髪を結いあげ、豪華なかんざしを何本もその髪に差していく。雛人形のようなあでやかな姿だつた。

根岸が現れた。

「女神の支度は出来たかな」

髪を結つていた女が振り向いてにっこり笑う。琴音を支えている女達はさつきまで台所にいた女達だったが、この女は明らかに外の、都会の匂いがした。紅い唇がきゅっと笑う。

「お綺麗です。火の女神にふさわしいお姿ですよ。着物も髪形もよくお似合いだわ」

「古臭い巫女の格好など、我らの女神には不釣り合いだからね。君にデザインを頼んで良かった。さすが売り出し中の「デザイナーさんだね」

根岸はお世辞を口にし、こけた頬に薄笑いを浮かべながらうつらうつらしている琴音を眺めた。そして細い顎を右手でつかみ、上を向かせた。

「恐ろしい龍もこつして眠つていたら、ただの子供だな。女神さま、もう少し大人しく眠つていてくださいよ。準備が全て整つまではね。目が覚めたら、あなたは祭壇の上で、炎の女神として君臨することになるのだから」

根岸は琴音から手を離し、踵を返した。部屋を出るとそのまま土間へと向かい、社務所へと入つた。

社務所の窓のカーテンを少しずらすと、境内が見える。そこには既に大勢の若者が集まつて来ていた。参道の脇に整然と並んでその

時を待つてゐる。

そう、長い間、根岸はその時を待つてゐたのだ。初めてこの村を訪れてから二十年以上の間。

その頃、根岸はまだ大学生で民俗学の研究をしていた。たまたま火龍教に興味を持ち、研究のために訪れた火王村で琴音の母、真山鈴子と出会つたのだ。まだ少女といつてもいいような年頃の鈴子だつたが、その美しさは目を見張るものがあつた。そう言えば、琴音はその頃の鈴子によく似てゐる。

火龍教の研究にのめりこみながら、次第に鈴子に心惹かれていつた。その思いは抑えがたく、大学卒業を機に火王村に移り住んだ。根岸は火龍教と鈴子に自分の青春の全てを注ぎ込むことを誓つた。根岸のそんな思いを鈴子は知つてゐると信じて疑わなかつた。

それなのに、鈴子は神社を継ぐために婿養子を取つたのだ。神職の資格を持つ貴臣を夫に選んだ。それは鈴子の意思というよりは、鈴子の父親や神社の氏子達の意思であった。それはわかっていたのだが、実際に鈴子が結婚するという事実を根岸は受け入れられなかつたのだ。いつのまにか、根岸は火龍教と鈴子は自分の物であると思いつ込んでいたのかもしねない。

根岸は絶望した。こんなに尽くしてゐるのに、何故自分を省みようとしてない？ 絶望は次第にどす黒い感情へと変質していった。と同時に、鈴子を慕う心もまだ枯れずに根岸の心の奥底で種火となつて残つていた。

やがて鈴子は笙を生んだ。根岸の目の前で、鈴子は幸せそうに笙を抱き、ほほ笑んでいる。その姿を見るたびに、根岸の心の闇はどんどん膨張していった。

しかし琴音が生まれて事態は一変した。

原因がわからない不審火が続き、幸せそうだつた鈴子の顔に深い苦惱が現れるようになった。苦惱の理由を鈴子は根岸に打ち明けた。

「琴音は龍の印を持つてゐるの。火を操り、野を焼き、山を焼き、

村を焼き、窟に閉じ込められた龍の印を……」

鈴子の祖母が同じような力を持つていたらしい。真山家には時々龍の印を持った子供が生まれるのだと母から聞いた事がある。龍の窟の封印を護るために脈々と受け継がれてきた真山の血筋に龍の印が現れるという事は龍の呪いの他ならない。誰にも知られてはならないのだと言い聞かされていた。

「誰にも言えない……。琴音が呪われた力を持つ娘だなんて……」

不安に震える鈴子を見ながら、根岸の心はなんだ喜びに満ち溢れていた。ようやく鈴子が自分を信頼し、頼ってきた。そして重大な秘密を共有している。

そして根岸の心の闇は琴音へとその目を向けたのだ。龍の炎は全てを焼き尽くした。野も、山も、畑も、村も、人も、自分の邪魔をする物全てを。龍の力が欲しい。そうすれば邪魔なものは全て焼き尽くす事が出来るのに……。

恐ろしい願望はやがて打ち払いがたい妄想となつた。根岸はその妄想に取り憑かれ、心の闇が一気に根岸を支配していった。

琴音が三歳になつた時だつた。発端は些細な兄妹喧嘩だつたのだろう。普通であれば、兄が妹突き飛ばして、妹が癪を起して泣き叫ぶ。それで済んだはずだつた。

が、琴音が癪を起して泣き叫んだ時、部屋のカーテンに火がついた。炎は一気に薄い布を舐めて、天井へと走る。

火事に気付いた根岸が部屋に駆け付けた時、笙が這いつくばりながら部屋から出てきた。慌てて笙を外に連れ出す。そこへ父親の貴臣が駆けつけた。まだ琴音が中に残つていると笙から聞き、血相を変えて中に飛び込んだ。

根岸も慌てて部屋の中に一步入つた。その時は貴臣の手伝いをしようつと思っていたのだ。その時は。

渦を巻く煙の中から泣き叫ぶ琴音を抱えた貴臣が苦しそうにむせながら出てきた時、根岸の中の闇が吠えた。

焼き尽くせ。龍の炎で、焼き尽くせ。

根岸は琴音を貴臣の腕から抱き取った。貴臣は床に膝をついて激しくせき込んでいた。根岸は琴音を床の上に置くと、貴臣の腕をつかみ乱暴に引き起こした。そして、渾身の力を込めて、炎の渦巻く部屋の中へと突き飛ばした。

貴臣の姿が煙に呑まれて消えた。

扉を勢いよく閉め、手で押さえる。

扉を激しく叩く音。

がたがたとゆれる扉。

隙間から吹き上げる黒い煙。

琴音の泣き叫ぶ声。

そして、長い長い断末魔の悲鳴。

根岸は身体で扉を押さえながら、笑っていた。それは狂気の笑いだった。

琴音の力は龍の力であり、闇そのものだ。自分が長年心の中で飼い慣らし、育ててきた闇。そして誰の心の中にも存在する闇。龍の炎は闇を解き放つ力なのだ。心の闇こそ人々が恐れ忌み嫌いがらも惹かれてやまないモノ。いつか自分は闇を支配する者になつてやるならぬ。

.....

境内に集まっている若者の群れを見ながら根岸は満足げに頷いた。ここに集う者達は皆自分の心の闇に囚われ、もて遊ばれている。そう、以前の自分のように。彼らを支配する事は闇を支配する事の他ならぬ。

根岸の顔に浮かぶほほ笑みはいつかの狂気の色を帯びていた。

山深い神社の境内は暗くなるのが早い。日が少し傾きかける頃には山影となり、夕刻の金色の光は届かなくなる。闇が他の場所より

も早く訪れる場所だ。

白い着物の上に黒い衣をまとった女達が本殿に現れた。手には火のともつた小さなろうそくを持っている。整然と並んで静かに本殿の短い階段を下り、参道沿いのかがり火に火を入れて行く。

集まつた群衆からおおつといふ低いどよめきが湧きあがつた。いよいよ始まるのかという期待の声だ。少し涼しさを帯びた山の空気を押しのけるように、炎の熱気が境内に満ちて行く。

本殿の中には大きな和太鼓があり、黒装束の男が撥ぱちを手に叩き始めた。よく見ると、根岸と共に琴音とトーマをさらつた男だった。鋭い瞳は興奮と喜びで異様な輝きを帶びている。

太鼓の太い音がびりびりと腹に響く。

太鼓はゆつくりと規則正しいリズムで境内に響いていた。それまるで龍の鼓動のようだ。ざわついていた境内はやがて静まりかえり、龍の鼓動だけが響き渡る。

松明を持つた黒装束の男達が本殿から現れ、大松明を取り囲んだ。太鼓の刻む鼓動が徐々に速さを増していく。

松明が一斉に大松明の中に差し込まれた。

ごおおつといふ低い音と共に大松明から炎が上がつた。

一気に炎の柱と白い煙が薄紫の夕暮れの空へと駆け上る。

歓声と拍手が境内に満ち溢れた。あちらこちらでフラッシュの白い光が瞬く。観客達の携帯の光だ。記念すべきこの聖なる炎を、なんとか自分の物にしたい。自分達の望みを叶えてくれる、奇跡の炎。人々の欲望が油のように炎に注ぎ込まれていく。

大松明の炎は時々大きく火の粉を巻き上げながら、勢いよく燃えさかる。

「あちい……」

タケルは頬がちりちりと痛くなるような熱気を感じた。異様な興奮が炎と共に境内の中を渦を巻きながら流れて行く。その勢いにタケルは船酔いのような気分の悪さを感じ、思わずしゃがみこんで耳を押さえた。

「立つておけ。何があるかわからん」

竜介が厳しい声で言いながら、タケルの腕を引っ張りその身体を支える。

太鼓の音が激しく鳴り響き、炎が吠え、煙がうつねる。

本殿に人影が揺れた。

朱塗りの輿^{こし}を担いだ黒装束の男達。そして、その輿の上には一人の小さな人影があった。

白い着物に緋色の上着、金色の髪飾り。

「！」

タケルは気分の悪いのも忘れ、叫びそうになり、竜介に口を押さえられた。

うつろな表情で輿に座っているのは紛れもなく琴音だった。

「琴音さまが出ました」

根岸の元に報告に入る。

社務所で境内の様子を見ていた根岸は大広間へと戻った。

大広間ではトーマがやはり夢うつつの状態で座布団の上に寝かされていた。

「さあ、君の出番がやつてきたよ。起きなさい」

根岸は不気味なまでのにこやかさでトーマを覗きこんだ。

トーマは重たい瞼を必死で開け、根岸を見上げた。身体に力が入らない。必死で寝がえりを打つと、なんとか上半身を上げることが出来た。

「薬もそろそろ切れてきたころだが、こういう薬は結構後にひく。琴音も目は覚めているがぼんやりしていたよ」

「……琴音ちゃんは、どう、したんですか？」

「今から舞台の上でお披露目だ。新しい火龍教の教祖としてね」

「……」

トーマは必死で立ちあがろうとする。なんでこんなに身体が重いんだろう。まるで身体中に鉛でもくっついているみたいだ。

根瘤がぐいっと一マの腕を持ち、乱暴に引き上げた。
「さあ、君にもお仕事がある。いひて来てもらおつかな
やしてトーマを引っ張りながら歩き始めた。

♪ 続く

本殿の輿に座られた琴音はぼんやりと田の前の光景を眺めていた。

火が燃えている。大きな火……。顔がちりちりするくらい。ここはどこだろう。沢山の人がこちらを見ている。何を見ているの？ 私を見ているの？ ねえ、どうしてそんな妙な目で私を見るの……。頭が痛い。何かを一生懸命考えようとするのに、ちつとも頭が働かない。炎の暑さと自分に降り注ぐ人々の好奇の視線。その感覚だけが妙に生々しい。

「琴音さま。聞こえますか」

耳元で男の低い声が響く。まるでお風呂の中で聴いているような、どこから聞こえているのかわからない。

「あの炎はあなたの炎。あなたが作った炎」

「そんなはずはない。わたしはあんな炎、作った覚えはない。

「美しい炎です。あの炎が全てを焼き尽くすのです。この世の汚れたモノを全て。あなたの炎はこの世の汚れの全てを焼き尽くし清めるのです」

男の声がぼんやりした頭の中にじわじわと沁み込んでいく。わたしの炎。焼き尽くし清める。わたしの炎。

琴音の中をその言葉がこころと転がり始める。

「あなたの炎は美しい」

そうかしら。そんなこと初めて言われた……。そんな風に思う人もいるのかしら。美しい。そつ……ね。こんなに一生懸命燃えていれる炎は、美しい……かも。

「でもこの炎はすぐに消えてしまう。ほら、小さくなってしまいそう。あなたが少し手を貸してくれれば、もっと元気になるのですよ。お願いします。ほんの少し、力を注いであげてください」

男の声は優しくねだるような響きで琴音の中に響く。

琴音は言われるままに右手を炎へとかざした。

炎の熱気が手の平に伝わってくる。

じゃあ、少しだけ。元気になってくれるなら……。こんなに頼まれたんじゃ……断れない。

琴音は目を閉じた。自分の中の小さな炎がゆっくりと右手の方へと移動していく。

さあ、炎よ。もつと元気よく、燃えなさい。

大松明の橙色の炎が一瞬白く光り、膨らんだように見えた。

「おおおお……。

龍の咆哮のような音が炎と共に空へと駆け上つていく。境内の群衆からひと際高い歓声が上がった。

「女神だ。龍の女神だ」

誰かが叫ぶ。

太鼓の音が激しさを増し、炎がますます高く夜空を焦がし始めた。タケルは言葉を失っていた。

琴音が手を炎にかざした直後、耳がきーんと痛くなるような衝撃波がタケルの頭を直撃した。琴音の意識は曖昧で、何を考えているのかちつとも読み取れないが、琴音から発生したその波の強さは予想以上だ。

境内に集まつた人々の興奮の度合いがどんどん増していく。感極まって泣き出す若い娘、突き上げるような太鼓の音に合わせて憑かれたように身体を揺らす者、叫びながら本殿へ駆けあがろうとして取り押さえられる者。

竜介が小さく舌打ちした。

「遅い。一平のやつ、何してる。押さえが効かなくなるぞ……」

タケルは自分の周りを取り巻く激流にもみくちゃにされながら、必死で自分を保とうとしていた。

まともにこの流れを受け入れていたら自分がパンクしてしまう。

なんとかして自分の中に流れ込もうとする狂気の思考を遮断しなくては……。しかしそうしたタケルはその術を身につけてはいない。

「ダメだ」

タケルは遂に耐えきれなくなり、その場にへたり込んだ。

と、その時。

石段の方から激しく言い争う声が響き、警察官が大勢なだれ込むよう境内へと昇つってきた。

「困ります！」

黒装束の男達が血相を変えて警察官を押しとじめようとするが、警察官達は構わず境内に入り込んでくる。

異様なまでに興奮していた群衆は水をかけられた野良犬のようにあっけに取られて警察官達を眺めている。

「責任者はどこですか！」

背広を着た「リラのよつないかつい男が警察手帳と薄い紙を手に前に進み出る。左腕の時計を見ながら日付と時間を告げると、「火龍教本部火王神社、家宅捜査に入ります。はい、これ、令状！」

畳みかけるように言い放った。

太鼓の音が止まる。今までとは違ひ、困惑と不安に満ちたざわめきが徐々に広がり始めた。大松明のぱちぱちとはぜる音が妙に大きく聞こえてくる。

警察官達は群衆を取り囲むように境内の隅々と参道沿いに立つた。何が起こったのかわからない人々はあっけにとられ、あるいはうろたえながら辺りを見回している。

本殿で太鼓を叩いていた男も茫然と立ちつくしていたが、はつと我に返り、近くにいた女に目配せをした。女は小さく頷くと社務所の方へと走つていく。

警察官が一人本殿へと上がってきた。鋭い視線で周囲の者をけん制しながら、ゆっくりと琴音に近づく。

琴音は焦点の定まらない瞳のまま、ぼんやりと座つてているだけだ。

「真山琴音さん、だね？」

警官は声をかけながら、用心深く琴音の前で身をかがめた。

その途端、太鼓の前にいた男が獣のようなうなり声を上げて警察官へと突進した。体当たりを食らわし、警察官を跳ね飛ばす。

床にふつとばされた警察官はすぐに立ちあがつた。血走った眼で睨みつける男をぎらつと睨み返した。

「公務執行委妨害で逮捕する！」

警察官の鋭い声が響く。同時に男がまたしても床を蹴り、警察官につかみかかつた。

それが合図になつた。

境内で警察官と押し問答をしていた黒装束の男達が一斉に暴れ始める。それに呼応するように、群衆が騒ぎ始めた。

境内は一気に混乱した。

境内が蜂の巣をつついたようなさわぎになつてゐる頃。

根岸はトーマを土蔵の前に立たせた。トーマも琴音と同様、まだ薬が抜けきらずふらふらしている。根岸はその手に鍵を握らせる。そして、トーマの耳に口を寄せると囁いた。

「この扉を君が開けるんだ。中にはいる笙くんを、琴音さんのお兄さんを出してあげてよ」

トーマは立つてゐるのがやつとだつたが、手にした鍵を握りしめながら根岸を見た。

「……どうして、僕が」

「彼を閉じ込めたのは私だよ？ 私がこの手で鍵を開けてみなさい。彼は怒り狂つて私をぼこぼこにしてしまうだろ」

根岸の声は笑いを含んでいる。

「私は平和主義者だから争うのは嫌いなんです。殴られるのも嫌いだからね。君なら笙くんも殴つたりしない」

なにかがおかしいような気がする。トーマは頭を振る。なんか違うと思いながら、少しも頭が働かないのが腹立たしい。

「あなたは、どうするんですか」

「私は本殿にいるよ。琴音さんの晴れ姿を見守りにね」

くくくと小さく笑う。ああ、嫌な笑いだ。何かきっと良くないことを考へているに違いない。トーマは土蔵の壁にもたれながら、しきりに根岸を見る。

「笙くんさえ出してくれれば、君の仕事はおしまい。後は好きにすればいい。家に帰つてもいいよ。ただし車は出せないけど。そうだ、帰りの地図くらこは書いてあげよ」

根岸はいやらしく笑いながらトーマの肩をぽんぽんと叩くと、社務所の方へと戻つていく。

トーマはぼんやりとその後ろ姿を見送つた。そして手の中の鍵を見る。古びた長い鍵だった。何が起るかはわからない。でも、この土蔵の中の琴音のお兄さんを出して上げなくてはならない。だって、琴音ちゃんに約束したじゃないか。必ずお兄さんを助けようつて……。ぐるぐると取りとめない考えが浮かんでは消える。

土蔵の扉にはがつちりとカンヌキがかかつてあり、それをいかめしい南京錠が封じてある。手の中の鍵はこの南京錠の鍵のようだ。

トーマは南京錠のカギ穴に鍵を差し込もうとした。が、指先が細かく震えてなかなか入らない。ずいぶん苦労してようやく差し込むと、ゆつくりと回した。がちやりという重い音が響く。

南京錠を外し、門を抜き取つた。

土蔵の扉をゆつくりと開ける。

そこには笙が立つていた。

その姿はまるで青白い幽鬼のようだった。整った顔立ちに血の気はなく、目だけが鋭く光つている。そして身体全体から怒りが湯気のように立ち上っているのが見えるよつだった。

「琴音ちゃんの、お兄さんですかね？」

トーマは笙を見上げた。

「……君は誰」

扉を開けたのが見ず知らずの子供だったので、少し驚いたのか、

笙の瞳からわずかに鋭さが消えた。

「琴音ちやんの、友達です。琴音ちやんを、助けてください。」

「……琴音を助ける?」

「笙の口から出る言葉こは鋭い刃が宿つていいようだつた。」

「根岸さんを止めてください。琴音ちやんが、利用されてるだけなんです!」

すがりついてアーマー訴えた。笙の目が細くなる。

「……琴音はどこにいる?」

「多分、本殿に。今、儀式の真っ最中のはずです。」

笙は黙つて空を睨んでいたが、踵を返し土蔵の奥へと入つていいく。

再び現れた時、笙の手には一振りの刀が握られていた。

「!」

トーマは思わず息を飲んだ。笙はその刀を手に風のよう駆けだした。引き留めようとしたが、身体がついていかず、トーマはそのままひっくり返つてしまつた。

「ちょ、ちょと! 珂さん!」

なんだかまずい事になつそうだ。トーマはよろよろしながら立ちあがり後を追つた。

› 続く

（後書き）
3（

いよいよクラスマッチクスへ……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1190y/>

タ・ケ・ル

2011年11月27日16時54分発行